

社会貢献の功績

- ▶精神的・肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧、幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績

 特定非営利活動法人 With 優 038	 やすづか学園菱里地域 支援委員会 070	 特定非営利活動法人 ロバの会 102
 NPO 法人 日立理科クラブ 040	 あさひ福祉作業所 072	 鈴木 剛生 104
 更生保護法人 両全会 042	 肢体不自由児水泳訓練 教室 ラッコの会 074	 笹原 留似子 106
 社会福祉法人 福田会 044	 かたくり工房 076	 平田 彰宏 108
 特定非営利活動法人 京都ほっとはあとセンター 046	  長野県信鈴会 078	 齋藤 充 110
 特定非営利活動法人 このゆびとーまれ 048	 豊能障害者労働センター 080	 広瀬川倶楽部 112
 美野島司牧センター 050	 ファイナルステージを 考える会 082	 特定非営利活動法人 ジャパンマック福岡 114
 國井 美保子 052	 うつろ木ファミリー 084	 渡邊 修次 116
 公益財団法人 徳島県 老人クラブ連合会 054	 認定 NPO 法人 うりずん 086	 社会福祉法人 北海道いのちの電話 118
 安田 未知子 056	 草柳 和之 088	 神戸市立住吉中学校 野球部 OB 会 120
 中本 忠子 058	 五色園区自主防災隊 090	 羽田 勝 122
 社会福祉法人 カリヨン子どもセンター 060	 特定非営利活動法人 かながわ 森林インストラクターの会 092	 金田 聖夫 124
 認定 NPO 法人 自立生活 サポートセンター・もやい 062	 榎美会 094	 及川 リウ子 126
 望海地区在宅サービス ゾーン協議会 064	 女川1000年後の命を 守る会 096	 栗山 さやか 128
 公益財団法人 ふきのとう文庫 066	 高橋 美知子 098	 岩田 雅裕 130
  高島 法子／ 榎本 恵子 068	 大石 由紀子 100	

特定非営利活動法人 With 優



山形県

山形県米沢市で、フリースクールや就労支援を兼ねた会員制の居酒屋などを運営する NPO 法人。代表の白石さんが、大学卒業後の就労経験などから平成19年にフリースクールを設立するに至った。フリースクールの他に、15歳から39歳までの就労を支援する「置賜若者サポートステーション」や中間就労支援の場となる「会員制居酒屋結」を運営している。この居酒屋は、接客などの接遇等を通じて、社会へ出る前の予行演習の場となるため、客には主旨を理解した上で来店してもらうため、会員制としている。また経済的理由でフリースクールに通えない生徒のための「教育支援基金の運営」も行っている。この他、就労体験や相談の場を兼ねた「カフェレストラン」の運営や、支援の可視化を目的とした「ひまわりプロジェクト」といった事業を行った。

代表
白石 祥和

平成27年度社会貢献者表彰を受賞させていただき、大変光栄に思っています。

With 優は2007年5月に任意団体として立ち上げ、地域のどんな子どもも大人も自分らしく生き生きと生きていける地域社会を目指して活動してきました。立ち上げの前月には活動への思いをチラシにして、米沢市内約7,000軒を毎日自転車で一軒一軒回り、自分の思いを伝え、賛同者を募りました。

思いに賛同した方、計11名で団体を設立、学校に行けない、行かないことを選択した子ども達、青少年の生活と学びの場であるフリースクールを立ち上げ、隣町から中学生の女の子が通い始めたのがスタートです。口コミで1人2人と少しずつ生徒が増え、支援して下さる方々も1人2人と増えてきました。

この活動を職業としてやっていきたい思いは設立を考えた時からありましたが、生活を維持できる収入はなかったため、朝は魚市場、夜は家庭教師、年末年始等の休みは季節労働のアルバイトをしながら子ども達と関わりを継続してきました。

そんな中で行政にも少しずつ活動を認めていただき、補助を受けられるようになり、現在に至ります。

今年で9年目、様々な課題を抱えている子ども達や若者と出逢い、繋がり、地域にないものは自分たちで作ろうと挑戦することを大切にしています。

現在は、フリースクールの他に、地域の若者の職業的な自立を支える置賜若者サポートステーション、就労を目指す若者のトレーニングの場でもあり、就労後も気軽に相談に来ることが出来、また、地域の方が飲食することで若者を応援、成長を見守れる場である会員制の居酒屋、世代を超えて地域の方が交流でき、子ども達の学びと成長を支えられる駄菓子屋&寺子屋、その他に生活困窮状態にある方の就労支援、またそのような世帯のお子さんの学習支援も行っています。団体独自に運営しているフ

リースクールでは経済的な理由でフリースクールに通えない子ども達のために、奨学金制度でもある教育支援基金も団体独自に設立し、運営しています。

今回の受賞に際し、分野を超えて信念を持って活動される皆さんに触れ、心の底から感動しました。この名誉ある受賞を励みに更に一步ずつ前に進めるように努力したいと思います。これまで活動を振り返る余裕もなく突き進んできた感じではありますが、受賞によって立ち止まるきっかけをいただき、多くの方の支えがあったことにも改めて気づかされました。地道で草の根的な私たちの活動に光を当てていただいたことに心から感謝いたします。

代表 白石 祥和



▲カフェレストラン風景



▲毎月地域の方と実施している清掃ボランティア



▲フリースクール卒業式



▲居酒屋を卒業する若者をお客さんと一緒にお祝い

NPO 法人 日立理科クラブ



代表理事
佐藤 一男

茨城県

日立製作所のOBを中心に、約100名のボランティアで構成され、日立市とその周辺の子どもたちに、科学に対する興味・関心を高める活動を平成21年から行っている。主に6つの事業を推進しており、①市内全小学校25校に「理科室のおじさん」を派遣し、理科授業の準備や休み時間にミニ実験教室を開催している。②「小・中学校の授業支援」として、教科書に加え身近な理科の応用原理を体感できる手作り教材の開発や科学クラブの支援活動など、平成26年度は合計484時間の支援を行った。③「理数アカデミー」科学者や技術者を狙っている中学生を対象に毎月1回、生活に関係した発展的学習を行っている。④「モノづくり工房」毎月2回土曜日に小学生を対象に工作や実験教室を行っている。⑤「科学ふしぎ発見教室」水ロケット教室を毎月1回開催し、年1回の大会ではその成果を競い合っている。⑥「地域科学教室」地域行事や青少年のための科学の祭典に参加して理科実験の面白さを広めている。これらの活動により、日立市の「理科好き」の子どもを増やしており、全国の理科クラブの手本となって他県からの見学も多く、特に「理科室のおじさん」の派遣は他に例がなく、科学教育推進の成功例として注目を集めている。

(推薦者：日立市)

「理科が楽しい」－次世代を担う子ども達への期待を込めて

この度、日立理科クラブが日立市のご推挙により平成27年度社会貢献者表彰を受賞し、誠に光栄に存じます。私たちの地道な活動が多くの皆様の高い評価をいただいた栄誉は、クラブ員は勿論、日立市教育委員会、学校の先生方や子供たちにも喜んでいただき、大変嬉しく、心から感謝申し上げます。

クラブ開所当時「理科は好きではない」子どもたちが、最近では「理科が楽しい」といっています。子どもたちに科学の不思議さ、面白さを理科実験を通じて発見してもらったことが良かったなと思っています。

日立市の全小学校25校に派遣した「理科室のおじさん」は、理科室をピカピカに整理・整頓し、子どもたちが理科に触れ合う場を作り、先生の理科授業の実験教材の準備や補助も担っています。小中学校の「理科授業支援」は教育現場に密着した実験支援を基本にしています。理科の単元に添った手作り実験教材を活用して理解しやすいよう心がけています。やる気のある中学生には、より高度な理科・数学教育を提供する「理数アカデミー」を設立して、月1回クラブ内で20数名の理工学博士や技術士が特別授業を展開しています。また最先端科学研究所見学会を実施しており、ノーベル賞を受賞した先生と握手して感激することもあります。さらに深く追求する「テーマ研究」にも力を入れ、その成果はJST（科学技術振興機構）などの発表会で優秀な成績を収めるようになりました。

子どもたちの科学への好奇心を育てるその他のイベントもあります。クラブ内にある工房での「モノづくり」。毎年開催される「水ロケット大会」。地域コミュニティー

への「理科出前教室」。地域や家庭でも科学への関心が深まりつつあることは喜ばしいかぎりであります。

日本のノーベル賞受賞の先生方も、夢中で自然に遊び、好奇心をもって科学をみつめた小中学時代が、科学者としての原点だったと述べています。私にも「電気」に魅せられた時代がありました。終戦後の昭和26年、中学2年生の時代に「真空管ラジオ」を作った時の感動でした。新任の先生に「電気」を学び、大学では電気工学を専攻し、大手電機メーカーで発電プラントの製造を担当、夢中で油まみれで働きました。「電気」は私の全てであり、「モノづくり」が私の人生となりました。

終わりに、安倍総理大臣が提唱した「1億総活躍時代」こそ、私たちOBが活躍するチャンスです。この受賞が退職後の科学者・技術者・教育者の一つの方向を示す事例として多くの仲間が立ち上がるきっかけになれば、と思っています。

代表理事 佐藤 一男



▲理科授業支援



▲工作教室



▲水ロケット大会



▲出前教室



▲先端研究施設の見学



▲地域科学教室

更生保護法人 両全会



理事長
小畑 輝海

東京都

大正6年(1917)に東京・市ヶ谷刑務所の教誨師であった藤井恵照氏が創設した更生保護施設で、自宅を開放して女性の出所者の収容保護と指導を開始した。平成7年に更生保護法人となり、同10年には渋谷区代々木の現在の敷地に移転した。現理事長小畑輝海氏が同19年に就任以来、寮生が自立し社会復帰を実現するため、寮生の「人間性の回復、再犯防止」を目指し、様々な取り組みを行っている。生活指導や就労支援に加え、各方面の講師を招いて文化的な活動を行なって情操を養う取り組みや、薬物や常習窃盗からの離脱プログラムを設け退会後もサポートを受けることができるようになっている。また平均4ヵ月の寮生活では短すぎる寮生のために、2、3年の寄り添い支援を行う新たな体制の準備も行っている。同会は、100年近い歴史を持ち、創設者の意志を受け継ぎながら、一般的な「更生保護施設」の枠を超え、制度や限られた予算の中から試行錯誤を重ね、再犯防止に向けた先駆的な試みを次々と実施している。「人間力と人間愛」に富んだ職員と多くの民間協力者の支援を得て、各種の指導と処遇が行われている。

今回は、社会貢献者表彰をいただき感謝申し上げます。式典に出席し他の多くの受賞された団体、個人の方々の素晴らしい業績を見聞き感動するとともに、まだまだ頑張らねばという勇気をいただきました。

当会は、東京都渋谷区に本部を置く女性のための更生保護施設で、来年で創立100年を迎えます。東京都内に分室を置き、生活支援施設や障害者のグループホームも持っています。

更生保護施設は、民間が運営し、帰る場所がない犯罪や非行をした者の一時的な住居の提供、社会復帰のための指導・支援を実施し全国に103施設があります。

今回の受賞は、更生保護施設として初めてで、安全・安心な社会の基盤づくりに人間力と人間愛で再犯防止のために日夜努力している全国の施設・職員にとっても励みになることと喜んでいきます。

ところで、当会では、数年来、「処遇センター化」と退会後の「寄り添い型ケア」を重点課題として、その体制作りに取り組んできました。

処遇センター化では、生活指導、就労支援、情操面からの人間性の回復教育といった基本的な支援のほかに、当会の女性対象者の大半は薬物事犯者や常習的窃盗事犯者といった依存症的な事犯であるため、これらの離脱のために職員による指導に加え、臨床心理士等の専門家やベテランの保護司等のカウンセラー等多数の民間協力者の支援を得て離脱のための専門改善指導を行い処遇の充実を図っています。

また、当会の滞在期間が平均3～4か月と処遇期間として十分でないため再犯防止効果を上げるためには、相談できる支援者のいない退会者への継続した寄り添い型ケアが必要です。

このため、刑事司法と社会福祉の狭間にいる退会者の自立、社会復帰機能を助成するため生活支援施設と障害者のグループホームの整備を進め、既に、運営を開始しています。これら自前の施設と関係官庁・機関・他の施設等との協力関係を築きながら、自立の可能性のある人には社会で生活できるよう支援出来たらと考えています。

この受賞をバネにして、今後とも一層の努力をしていきたいと新たな決意をしているところです。

理事長 小畑 輝海



▲上川法務大臣視察
当会事務室で職員と共に記念撮影



▲パソコン教室
パソコン（ワード、エクセル）指導を民間協力者により、週1回寮生全員が受けている。寮生一人に1台のパソコンを貸与し、余暇時間にもパソコンの練習をしている。



▲改善指導
覚せい剤等薬物離脱に関する重点施設となっているため、覚せい剤事犯の寮生全員に個別又はグループ指導を、専門職員により実施している。



▲退会者の訪問
両全会を退会した者について、寄添いケアとして退会後も住居や就労、薬物離脱のケア等サポートしている。退会する寮生には、いい時も悪い時も何かあれば寄るよう話しているが、この退会した元寮生は実家に帰ってくるように近況を話して帰った。



▲小畑理事長
年間約1,200人の参観者（更生保護女性会、保護司会、学生等）に対し、更生保護施設の在り方や役割など、両全会の運営を通して啓蒙し、理解と協力を得られるよう、小畑理事長が丁寧に説明している。

社会福祉法人 福田会



理事長
太田 孝昭

東京都

明治9年に創立され、日本で最初に児童養護を始めた組織で、創業139年を迎えた。長い歴史のなかで、大正9年にシベリアで難民化したポーランド人の孤児375人を受入れ、手厚く養育した事実は今でも同国で語り継がれている。現在は渋谷区広尾で児童養護施設「広尾フレンズ」、障がい者入所施設「宮代学園」、都内で充足率の低かった、都市型軽費老人ホーム「広尾グリーンハウス」認知症高齢者グループホーム「グループホーム広尾」を運営している。培われた児童養護の経験を活かし、同じ敷地内で高齢者施設を運営し児童と高齢者が心の交流を持てるような新規事業を導入したり、障がい児の放課後などのデイサービスと就労継続支援B型の福祉事業も開始するなど、積極的な運営を行っている。土地柄、駐日大使館との交流も多く、折に触れ児童は大使館からの訪問客と交流も深め、国際交流にも貢献している。「広尾フレンズ」内に設けられた「地域交流ホールさくら」では音楽会や素読会を定期的に開催し、地域の人々との交流に利用され、開かれた福祉施設の運営を心がけている。

(推薦者：安藤 秀行)

この度は、瑤子女王殿下ご臨席のもと、公益財団法人社会貢献支援財団安倍昭恵会長から社会貢献の功績者として、社会福祉法人福田会の活動をお認めいただき、表彰をいただきましたことを、心から感謝申し上げます。

福田会は明治9年に我が国仏教界の有力者の方々により創立され、児童養護・里親委託などを開始しました。それ以来139年の歳月が経過した現在、今回荣誉ある表彰をいただいたことは、役員・職員などの法人関係者が法人の長い歴史や現在の施設との関わりについてそれぞれの立場から一旦自分が立ち止まり過去を思い起こし、これからの未来を考える貴重な機会となりました。

長い歴史の中で、大正9年にシベリアで難民化したポーランドの孤児375人を受入れ、病気だった子どもたちが全員健康を回復し、無事本国へ送り届けました。福田会での孤児たちへの心遣いは、彼らの記憶に深く刻まれ、帰国後もずっとそれを育みつづけ、日本人への多大な好感と感謝の念を抱き、今でも同国で語り継がれています。そして、孤児の最後の方もお亡くなりになって、平成24年には90年前の孤児たちへの保護・養育事業へのお礼にポーランド大統領夫人の訪問があり「シベリア孤児救済事業完了90年」のプレートの寄贈がありました。平成27年には再度の訪問があり安倍首相夫人と共に記念の植樹をしていただきました。

また、ポーランドにおいて毎年実施している施設で生活している子どもたちによるサッカーワールドカップへの招待がポーランド大使館から福田会にあり、来年度は福田会の子どもたちに東京都の施設の子どもたちも加えたチームを編成し、ポーランドに派遣して世界の子どもたちとの交流を図ります。

国際交流は、ポーランドのほかにもオマーン・スルタン国、トルコ共和国やアジア諸国とも交流を進めており、今までの伝統と経験を活かし福祉の視点から国際貢献の一役を担うことを法人の目標にしております。

現在の福田会は、児童養護施設に加えて障害児入所施設、障害児の放課後等デイ

サービス、就労継続支援B型事業、都市型軽費老人ホーム、高齢者グループホーム等幅広く運営しており、職員の努力により子どもと高齢者の交流など施設利用者の処遇向上のみならず地域住民の皆様にはコンサートや素読会を開催しており、このような地域貢献事業も法人運営の目標にしております。

今回の式典で内館牧子選考委員長は、「曾野綾子元委員長が賞金をご自分のためにお使いくださいといつもお話しされ、私はこの言葉が大好きです」と挨拶されました。このような寛大なご配慮に感動したのは私一人ではないと思います。

お言葉に甘えて、賞金は職員皆と使わせていただく予定です。

誠に、ありがとうございました。

理事長 太田 孝昭



▲2014.01.07 トルコ首相（当時）夫人来訪



▲2014.12.20 広尾フレンズクリスマス会



▲2015.02.27 ポーランド大統領夫人来訪



▲2015.05.10 グリーンハウス広尾せせらぎまつり



▲2015.09.21 宮代学園大阪旅行



▲グループホーム広尾 余暇活動

特定非営利活動法人 京都ほっとはあとセンター



理事長
西村 直

京都府

NPO 法人京都ほっとはあとセンターの前身組織である京都授産振興センターは、京都府・京都市の全面的な協調支援を得て、府内の86カ所の授産施設や共同作業所が参画し、障がいのある人たちの自立と社会参加を促進するための団体として、平成7年4月に発足し、障がいのある人が作った製品、いわゆる「授産」製品の品質向上のために専門家を派遣する事業、京都駅ビル内に常設販売所を開設する事業に着手した。その後、就労継続支援A型施設「喫茶ほっとはあと」の運営も開始し、障がい者15名が一般就労に向けて実地トレーニングを積んでいる。また、B型事業所から一般就労者を送り出す事業にも取組み、名乗りを挙げた74名の障がい者の内、39名（平成27年3月時点）の一般就労移行に成功している。この取り組みは全国に先駆けて、京都府だけが行っている事業である。加えて、小規模であるがゆえに、個別では大量の製品受注の困難な事業所の共同受注センターとして、京都府や京都市等からの共同受注に応じている。受注内容に応じて、発注対象事業所の規模や能力に見合った仕分けを行い、品質の安定を保ちながら、納品等を含めた調整業務を担っている。製品の製造のみならず、京都市役所の周りの花壇の整備や京都府庁舎や京都市施設等の清掃、京都市立保育園ゴミ処分、民間社会福祉施設の清掃といった役務も受注している。

特定非営利活動法人京都ほっとはあとセンターは、京都府・市の全面的な協調支援を得て、1995年に府内86カ所の授産施設や共同作業所が参画し、障害のある人たちの自立と社会参加を促進するための団体として、発足しました。今は175カ所の会員施設となり、今年度で結成20年を迎えています。

当時、障害のある人たちが作った製品は「授産製品」と呼ばれており、私たち関係者は「授産」と言う障害のある人に仕事を授けるといった意味の言葉に違和感を覚えていました。そこで、2006年に新たな呼び名を全国から広く募集し、数多くいただいた応募の中から、「ほっとはあと製品」と命名することにしました。この呼び名はその温もり感とともに今はしっかりと定着しています。

また、私どもは「ほっとはあと製品」の品質向上と販路拡大も目指し、ものづくりの専門家＝プロを施設に派遣する事業や外部講師を招いてのワークショップ・セミナー等を開催しています。またJR京都駅ビル内に「ハートプラザKYOTO店」（2015年10月10日より京都市内寺町三条の名店街に移転）、嵐山天龍寺前に「ぶらり嵐山店」、京都府庁内に「ハートショップまごころ店」の常設販売店舗を構えるほか、企業などの様々な団体のイベントでの出店の機会でも「ほっとはあと製品」の販売と周知を行っています。更には障害者優先調達推進法の京都府内共同受注窓口となり、企業や官公庁からの清掃業務等の役務や製品の発注を受け、各事業所へ仕事を委託し、障害のある人たちの工賃の向上に貢献しています。

また、障害のある人の就労を支援事業として就労継続A型事業所「喫茶ほっとはあと」を京都市内で2店舗開設し、そこでは15名の障害のある人が、一般就労に向けて訓練をしながら所得の保障を目指しています。その他にも、就労移行支援員を希望の施設へ派遣し、一般就労を目指す障害のある人への支援活動も行っています。

今回、貴財団より社会貢献者表彰の栄誉を賜り、関係者一同大変感謝しております。式典では今回表彰された皆様とお会いでき、様々な分野での社会貢献活動を知ることができた大変な驚きとともに、人の心の温かさを再認識させていただける貴重な機会となりました。この経験を励みとして、私どもの今後の活動が障害のある人たちの幸せにつながるよう、さらに精進を重ねていきたいと思っております。本当に有難うございました。

副理事長 粟津 浩一



▲「福祉から雇用応援事業」企業や就職した先輩の声を聞く会



▲4事業所で共同受注 支援学校の生徒さんと京都市役所前広場除草・花植え



▲平成27年10月10日新店舗オープン



▲12事業所で共同受注 100歳の敬老祝い品 さをり織り肩掛け



▲年6回のワークショップ開催 福祉事業所のものづくりカアップに貢献



▲平成13年より天龍寺の向かいに「ぶらり嵐山店」開設



▲平成20年開設のA型事業所「喫茶ほっとはあと本店」



▲毎週月曜日開催の「福祉から雇用応援事業」活動報告会

特定非営利活動法人 このゆびと一まれ



富山県

富山赤十字病院に勤務していた看護師の惣万佳代子さん、西村和美さん、梅原けいこさんの3人が退職金を出資し、このゆびと一まれを開所させた。平成5年に富山県で初めての民間のデイサービス事業となった。看護師時代からの経験上、高齢者、障がい者・児、乳児と一緒に過ごす共生型福祉施設（日本で初めて）にしたが、「介護と保育は分野が別、補助金は付けられない」と行政から告げられ、賛同者の寄附などでギリギリの運営をしていた。その後、市民の声の後押しによって、補助金を受けられるようになり、4年目には対象事業の緩和となり、8年目に介護保険法や障がい者総合支援法の成立で経営を軌道に乗せることが出来るようになった。行政とも協働で取り組むようになり、この共生型福祉施設は「富山型デイサービス」と呼ばれ、全国に展開している。

代表
惣万 佳代子

高齢者が「家に帰りたい」と願っているのに、願いが叶わず施設で亡くなっていることに疑問を感じ、平成5年、富山赤十字病院を退職し、高齢者だけでなく、子どもや障がい者などの誰もが利用できるデイケアハウス「このゆびと一まれ」を開所しました。看護師3人が退職金を出資してのオープンでした。

このゆびは、国の法律に基づいた郊外の大規模収容施設とは異なる、従来存在しなかった「地域密着・小規模・多機能」をコンセプトとした共生型福祉施設です。これが後の「富山型デイサービス」として発展し、今では全国1,300か所以上に増えています。

看護師としてあらゆる人々を対象に看護を実践してきた経験から、「誰も排除しない」という意志で、誰もが地域で家族のように暮らすことを目指しており、高齢者や障がい者、子どもが相互に触れ合うことで、日常生活の改善や自立の促進、思いやりを身につけるといった効果を生んでいます。

さらに、障がい者が働きながら自分自身も地域の一員であることを実感できるよう、地域に密着した就労場の拡大と、仕事の選択肢の拡大に努め、平成25年に就労継続支援B型事業所「はたらくわ」を開設しました。特区で認められ、全員が施設外就労可で働いています。

当初から現在まで、共生型福祉施設の普及に向けた行政への働きかけ、地域住民や関係者に対する講演活動等を行っています。平成14年からは、行政と協働で「富山型デイサービス起業家育成講座」を開催しているほか、ボランティアや起業家、医学生や看護学生等の施設での研修を受け入れるなど、「富山型デイサービス」を支える人材のすそ野の拡大にも取り組んでいます。

代表の惣万佳代子は、暮らしを支える看護師としての活動が認められ、今年第45回フーレンスナイチンゲール記章をいただきました。そして、この度、社会貢献者表彰をいただき光栄に思います。「今後とも精進しなさい」という励ましの言葉だと受けとめ、職員一同、身をひきしめています。

表彰式に参列した職員は、式の素晴らしさもさることながら、志の高い人達の存在を知り、刺激を受け意を新たにしています。

このゆびと一まれを支援して下さいました多くの皆様の賜です。感謝いたします。

表彰ありがとうございました。

副理事長 西村 和美



▲このゆびと一まれの原点



▲みんなで祝う20周年



▲午後のひととき、ゆずちゃんとハイタッチ



▲肩たたきしまーす



▲みんなでカルタ取り



▲代表の惣万さんと子どもたち



▲畑でとれた枝豆です



▲日常のひとコマ

美野島司牧センター



福岡県

平成2年頃、来日した主に南米の日系人労働者たちが、言葉や文化の違い、日常生活での不便な状況など問題を抱えており、福岡市でも同様の状況であった。カトリック教会が彼らの心の拠り所となっていたが、あまりに多くの相談がよせられることから、フランス人のマルセル神父に依頼し同6年にセンターが開設され、入管、健康保険、ビザなどの行政での手続きや、病院への付き添いから子どもの教育、賃金の未払いなど様々な面でサポートしている。また、同センターは施設の一部を薬物依存のリハビリをサポートするNPO法人九州ダルクや路上生活者支援のNPO福岡おにぎりの会、NPO法人美野島めぐみの家などにも開放し、センターの活動として共に歩んできた。これまでに延べ50万人以上が利用してきた。21年に亘る活動。

神父
コース・マルセル

1952年創立。美野島カトリック幼稚園として設置され、中央区浄水通教会を移築した聖堂がある。1994年4月幼稚園が閉園され美野島司牧センターとなる。ラテンアメリカ共同体、薬物依存者リハビリセンター、路上生活者ホームレス支援、外国人移住労働者支援を支える拠点となり現在に至る。

この度、社会貢献者表彰を拝受し身に余る光栄を感じております。

この小さな美野島司牧センターは1994年より社会の中で弱い立場に置かれている方々と共に歩んで来ました。昨年は20周年記念を祝い、今年は社会貢献者表彰まで頂くことができ、感謝の念にたえません。

わたしどもは、カトリック教皇フランシスコの教えにならい「教会は現場の医院のようにならなければいけない」ということを実現し色々な働きで、寂しくなり、苦しみ喘ぐ人々に寄り添って、彼らの傷を癒していくこと、彼らの心が暖かくなることを、思いやりと優しさを持って続けてきました。当センターはカトリック信徒だけではなく超教派のクリスチャンや仏教徒、宗教を越えて大勢の人々が弱い立場に追いやられている方々と共に生き、働いています。

1990年に日本政府は労働力の不足を補うために、ブラジルとペルーの日系人3世までに労働ビザを発行しました。この日本政府の決定は日系人にとって「黄金の道」となり何千もの人々が一気に仕事を求めて日本に上陸することになりました。それに伴い入管、行政の手続きや、就業の諸問題、子供たちの教育問題など多岐にわたり問題が山積みとなり、それらの問題を解決し、心の拠り所とするためにカトリック福岡司教区の司教より任命を受け、美野島の地に「司牧センター」を開設することとなりました。

現在の活動としては主に、長崎県大村市の入国管理センターへ「移住労働者と共に生きるネットワーク九州」のメンバーと共に月に一度訪問し、様々な手続き、通訳、法律的なアドバイスと共に、スピリチュアルケアやミサ等精神的なサポートに重きを置いています。

1995年には薬物依存症者のリハビリ施設「九州ダルク」が開設されました。薬物依存症である当事者同士が助け合い、疎外と孤独に苛まれ苦しんでいる人に寄り添い一人にしないということが重要であるため、共同生活をしてお互い助け合いながら、日々ミーティングやプログラムをこなし「今日一日、薬物を使わない生き方」を積み重ねて現在12名の仲間と共に回復をめざしています。九州の地で20年前に蒔かれたダルクという希望の種は、九州全ての県に根付くことができました。

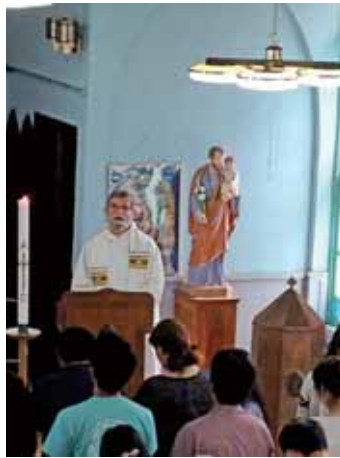
路上生活者支援として1998年より「福岡おにぎりの会」、2007年「美野島めぐみの家」が発足し、路上生活を余儀なくされた野宿者達に生きる力を与えるための一助として、温かい食事、衣類、日用品等を提供しています。2009年3月より生活保護申請が緩和され、野宿者は若干減少していますが、炊き出しには毎週平均100名前後の人達が温かい食事や、交わり、必要物資、散髪などを求めて集まっています。野宿者達の人権を守り、多団体と連携し彼らの自立支援の一端を担う事業を行い、公共の福祉に寄与すると共にこの場所が心のオアシスであることを願って活動しています。

この21年の歩みの中で、今の社会で弱い立場に置かれている人々と共に歩んでいくことは困難なことだと感じます。彼らの存在は認めにくく、理解しにくい現実です。しかし、

神様のお恵みと支援して下さる皆様により今日まで外国籍の方々、野宿者の方々、薬物依存症の方々と共に歩いてこられたことを有り難く思います。

最後に、社会貢献支援財団より、小さな美野島司牧センターを表彰頂き、大きな喜びとともに心から感謝申し上げます。

主任司祭 コース・マルセル



▲コース・マルセルのミサ司式



▲美野島聖堂外観



▲NPO ホームレス支援 福岡おにぎりの会 夜回りルート打合せ



▲NPO 法人美野島めぐみの家 聖堂内にて炊き出し



▲外国人移住者ネット 生活相談



▲九州ダルク19周年フォーラムより



▲聖堂内での野宿者への炊き出し



▲日系ペルー人の子供達とイースターのお祝い



▲日系ペルー人の子供達とイースターのお祝い

國井 美保子



兵庫県

兵庫県小野市で昭和48年から、地域住民を対象とした料理教室の講師を務め、家庭料理の指導を行うと共に、安定した家庭環境と地域福祉向上のために尽力してきた。また、精神障害者が社会参加できるように居場所作りなどを作ってきた精神保健福祉ボランティア「ステップ」の活動は、同市から受託して共に行うようになったほか、給食サービス配送ボランティア「いなほの会」で26年間にわたり一人暮らしの高齢者宅へ弁当を配るボランティアとして活躍している。

(推薦者：コミュニティーいちば)

この度は大変名誉ある賞を頂戴し、誠にありがとうございました。また、式典に至るまでの貴財団の皆様方のご尽力に対しまして心より感謝申し上げます。

当初は果たしてこのような賞を頂いてよいのかと自問する日が続きましたが、式典のスケジュール表・旅券が届きました頃には、今回の受賞を素直に喜ばなければ、折角私のような者を選んで下さった財団に対して申し訳ないと心から感謝の念がこみ上げて参りました。そして、推薦いただきました小野市立コミュニティセンターいちばの所長様をはじめ、これまでお世話になった多くの方々には有難うと思う気持ちで胸がいっぱいになりました。

授賞式の前夜祭と式典当日の二日間は、その盛大さと財団の細やかな御配慮にただただ感激し、言葉にならない有難さを感じました。この場をお借りして、深く深くお礼を申し上げます。

昭和48年3月、義母の突然の死に茫然としている私のところに、市立中央公民館の館長が来られ、義母の後任として料理教室を続けてほしいと懇請されました。未熟であると固辞する私に対し、「生涯教育とは教える側も共に勉強するものであり、貴方も学び続けてほしい」と励まされ大決心の末、中央公民館料理教室の講師を引き受けることになりました。

その後、市内各地に建設された隣保館からの要請が続き、一時は4館で月に16回の教室を引き受けてきました。「地元食材を使った今晚のおかず」を基本にし、お料理は「楽しく愛をこめて」をモットーに、85歳の今日まで42年間続けて参りました。今はコミュニティセンターと名前も変わりましたが、地域の皆さんとのお料理を通した交流が生き甲斐になっております。

昭和60年には小野市社会福祉協議会の高齢者への給食サービスに携わり、安否確認を兼ねた配送ボランティアを26年間続けることができました。待っていて下さる方々の笑顔を楽しみに、私自身も良い人生勉強ができたと感じています。

私が右腕を骨折した時には、夫が配達を手伝ってくれたこともありました。家を空ける事も多かった私が、今日まで頑張ってきたのも家族の支えがあったからと、改めて感謝しております。

平成11年兵庫県保健所において、精神保健福祉ボランティアの養成講座を友人数名と受講し、精神障害者の方との交流を目的に小野・加東両市の合同作業所へ通うようになりました。13年には家族会の会長様からの要請で、月1回の「カレーの日」を作るにあたり、ボランティアグループの結成をと考え、養成講座受講者に呼びかけ、精神保健福祉ボランティア「ステップ」を立ち上げました。心の病に苦しむ人の居場

所づくりとその運営、市からの受託事業にも取り組み、代表を10年務めて参りました。

今日までの私の活動は、すべてにおいて周囲の方々の支えと協力があってこそ感謝しています。これからも微力ながら地域の皆さまのお役にたてるように励んでまいりたいと思っています。

最後になりましたが、この度の受賞に改めて感謝申し上げますとともに、貴財団の益々の御発展をお祈り申し上げます。

國井 美保子



▲料理風景



▲盛り付け方の指導も行う



▲魚の向きや添え物の置き方も指導



▲色とりも料理のうち



▲地元の食材を使った肉じゃが



▲地元食材を使った今晚のおかずの出来上り



▲料理教室の皆さんと

公益財団法人 徳島県老人クラブ連合会



会長
伊丹 一夫

徳島県

徳島県で昭和32年に設立された老人クラブの連合会。同59年から、地域のひとり暮らしの高齢者をその地域の老人クラブ会員が定期的に訪問する「友愛訪問活動」を、「高齢者が高齢者を見守る全国初の試み」として開始し30年に及ぶ。現在では県内24市町村全てで友愛訪問活動は行われており、1,833名の友愛訪問員が5,047世帯を対象に定期的な訪問を行っている。この活動によって高齢者の安否確認はもとより、仲間の近況報告や世間話の相手になって孤独感の解消、孤立化や閉じこもりの防止にもなっており、高齢者の自殺予防にも有益な活動として継続している。

(推薦者：徳島県保健福祉部長寿福祉局長寿保険課)

「地域に必要とされる老人クラブを目指して」

この度は、私たち徳島県老人クラブ連合会に対し、荣誉ある社会貢献者表彰を賜り、安倍昭恵会長はじめ関係各位に心から感謝を申し上げます。

表彰式典当日、由緒ある帝国ホテル東京を会場に、瑤子女王殿下ご臨席の下、沢山の招待客の皆様にあたたかい祝福をいただきながら、安倍会長から表彰状を授与されましたことは、誠に身に余る光栄で生涯の良き記念となりました。

これもひとえに、先人の長年にわたる地道な活動を評価いただいたのであります。当会の概要から紹介させていただきます。

当会は、昭和32年に設立され、現在は公益財団法人として運営されています。県内24市町村全てに連合会が組織されており、会員数4万人、単位老人クラブ数800を数えています。

老人クラブは、老人福祉法第13条で法的位置付けがされており、高齢者自身の生きがいと健康づくりに加え、長年培った知識や経験を生かした地域づくりを目的として日々活動しています。

我が徳島県ではまもなく3人に1人が65歳以上の高齢者という本格的な超高齢社会を迎えていることから、私たち高齢者は介護予防に努めながら健康寿命を延ばし、元気高齢者として地域社会を担う気概で活動を展開していくことが、行政をはじめ関係機関から大いに期待されているところです。

こうした活動の中で、この度の受賞理由に挙げていただいたのが、「高齢者を高齢者が見守る全国初の試み」として、昭和59年から実施している「地域のひとり暮らし高齢者をその地域の老人クラブ会員が定期的に訪問する友愛訪問活動」です。直近の数値では、友愛訪問員数1,833人、対象世帯数5,047世帯となっています。

この活動が、「高齢者の安否確認や孤独感の解消、孤立化や閉じこもりの防止」に役立っているとご評価をいただきましたが、ひとり暮らしの高齢者の話し相手をしたり、電球交換や買い物の代行など、日常生活の些細な気遣いが友愛訪問の原点だと考えます。

この度の受賞を励みとして、これまで以上に老人クラブの三大運動である「健康」「友愛」「奉仕」を推し進め、地域に必要とされる老人クラブを目指して活動を続けていきたいと思っております。

どうもありがとうございました。

会長 伊丹 一夫



▲活動風景①



▲活動風景②



▲活動風景③



▲会員の手作り巾着袋をプレゼント



▲訪問員の活動手引きとなる友愛手帳



▲ひとり暮らしの方を招いたサロン

安田 未知子



介護老人保健施設 いずみ苑
長

沖縄県

昭和6年に東京で生まれ、第二次世界大戦を両親の故郷沖縄で迎え、学校長と牛島中将の伝令役として戦争に参加。校長の命で県外に進学していたかつての上級生に沖縄へ戻るよう訴える手紙を書き、戻った40名がひめゆり学徒隊となって全員命を落とした自責の念と教育の恐ろしさから教師になることを躊躇したが、「教師志望だった先輩たちの代わりに自分が」と沖縄初の女性英語教官となる。我が子5人の他に通算43人の子どもを自宅などで世話し、私費で進学させた。在職中に何度も大病を患ったが、沖縄の薬草服用や食事を見直し克服。定年後は介護老人保健施設を設立し、施設内にハーブ園を設け、無農薬ハーブの栽培を通じ障がい者の就労にも結び付けている。すべての障がい者と50余年を共に歩み、現在は、スペシャルオリンピックス日本・沖縄の会長を務めている。いつの日か、障がいを持つ人が安心して暮らせる村が出来ないかと「一人（ちゅい）たれいだれい」（一人ではできないなら支えあおう）の心で実現に向けて準備している。

表彰式典に出席して

平成27年11月30日、帝国ホテル東京にて、社会貢献者表彰式典に出席した。会場では、安倍昭恵会長のあいさつ、瑤子女王殿下のお言葉、表彰選考委員長内館牧子様のお挨拶から始まり、祝賀会は笹川様の乾杯で会が盛り上がった。家族・友人に囲まれて喜びの中に楽しい時間を過ごすことができた。

前日まで「なぜ、私が受賞するのか」が解らないまま説明会に出席した。会場には、49件の選ばれた人と、その家族がいて、1分間スピーチと共にスクリーンに出てくる美しい姿の活動状況を見て、やっと理解することができた。スクリーンを見ながら、皆さんの話を聞いていると、その活動の根の深さに感動し、涙が止まらなかった。「根がのびる程、枝のびる」との、みことばを思い出した。私は、70年間の月日は長いけど、広く浅い活動をしていたことに「お気づき」をいただいた。

戦後70年を振り返ってみると、13歳で第一高等女学校に入学したのに、牛島中将と校長との伝令として従軍し、校長の命令で、進学のため本土に行った42名に手紙を書いた。戻って来た40名は、ひめゆり学徒隊として全員が戦死した。教育の恐ろしさを知った私は、絶対に教師にはならないと思っていたのに、「未知子、教師とは人が人を教え導く大事な職業ですよ」との母の言葉で英語教師になり再び悩みを背負って、どう生きればよいのか解らないまま、43年の教職生活の中で、居場所のない子、進学したい子43名を自分の子5名と共に我が家で教え育むことができた。戦後の苦しい時代に主人の協力のおかげで子供たちは立派な社会人になった。「愛あればこそ」愛は見返りを求めません。どんな人でも「愛する心」は持っていますが、時には欲、見栄の為他人の命を奪うこともある。

私は、30年間大病を患い、3度も死線をさまいましたが、家族・両親・周りの人たちの愛に支えられて、今を生きている。

生きるということは、悩み、苦しみが多く全国の病人の方から「どうして病気を治したのか」との問いに「沖縄ハーブ健康法」を出版した。運命は変える事はできる。健康になるには「病院は調べる所・医者には調べる人・治すのは自分」と「強い精神力」と「食べ物」にあることがわかり実践した。やっと元気になり美しい娘も授かったが、10歳にして黄泉の国へ旅立った。あまりの悲しさに毎日泣き叫び、神・佛を信じるこ

とが出来なくなったとき、シスター渡辺和子様「みことば」で救われた私は「ことば」の重さを学んだ。

この度は、素晴らしい賞を下された社会貢献支援財団の皆様に、喜びと幸せの中に「お気づき」を下された事に感謝いたします。今日からまた、一歩を踏み出すことを誓います。

誠にありがとうございました。

安田 未知子



▲いずみ苑での安田さん



▲いずみ館の案内



▲いずみ苑のロビー



▲レクリエーションの部屋



▲ハーブ園



▲利用者の作品



▲自然に囲まれた施設の一部



▲音楽療法



▲音楽療法の一つ



▲芸術療法のひとつで利用者が描いた絵画

中本 忠子



広島県

広島市中区で昭和55年から保護司として活動する中、空腹が子どもを非行に走らせる大きな要因だと気付いた。保護観察中の少年に食事を振舞ったところ、同じような境遇の少年を連れてくるようになり、中本さんの家は行き場の無い子どもたちが、多い時で50人を余って入れ替わり立ち代わり来るようになった。中本さんはそうした子どもたちに余計なことは聞かず食事を振舞い、話をじっくり聴いて、「万引きは悪いこと、お腹が空いたらすぐここに来い」と伝え、不登校の子どもには、学校側とも連携し自然に更生へ導いている。中本さんは、一日に3升の米を炊き、市営住宅の自宅で食事をとらせるが、当初10年は自費で行っていた。中本さんのおかげで学校に戻ったり、仕事に就いて成人を迎えた青年から、毎年母の日にはプレゼントが贈られる。平成16年からは中本さんの活動を知った地域の人や保護司、更生保護女性会が協力して毎月2回、中央公民館で「食べて語ろう会」を開催するようになった。毎回20人～30人の子供たちが参加する。

この度は、栄えある「社会貢献支援者表彰」で賞をいただきまして、身に余る誉れと有難く思っております。

私は、広島市で30年余り、空腹ゆえに万引き等の非行に走ってしまった少年達に、自宅で食事を提供してきました。社会の片隅で、誰からの助けもなく、万引き等で何とか生きてきた少年達を、私は放っておきませんでした。その内、自宅が食べることの出来ない少年達で満杯となるようになりました。

そこで、自宅では毎日の食事提供を続けつつ、他に地域の人々の協力を得て、「食べて語ろう会」として、公民館で月2回少年達のための食事会を開くことにしました。

その内、30余年前に通って来ていた少年達も立派に成人し、会社経営をしている者は後輩達を雇用して、非行少年達の立ち直りに協力してくれています。

とても有難いことだと、嬉しく思っています。

社会貢献者表彰式に関しては、上京前からも、初日、式典当日も大変お世話になりまして、心からお礼を申し上げます。何から何まで、至れり尽くせりのお心遣いには、感心するばかりでした。

初日の第1部では、各受賞者や団体の功績紹介があり、それぞれが50年、60年の永きに渡りご苦勞された様子が伝わり、感銘を受けました。

また、行事の合間には、控室で各受賞者の方々と話をする機会があり、より多くの苦勞話をお聞きしたり、交流を深めることができました。

一方で、この様な活動を拝見した後、果たして私のしてきた活動が、この賞をいただくだけの価値があるのだろうか？と、私は恥ずかしく思いました。

2日目の表彰式典では、瑤子女王殿下のご臨席を賜わり、厳かな雰囲気の下、開式となり私も少し緊張しました。

その後、安倍昭恵会長と直々にお話させていただき、やさしさ溢れるお人柄にふれることが出来ました。この様な機会を与えていただいたことに、心から感謝しており

ます。

第2部では、冒頭、日本財団の笹川会長から暖かい励ましのお言葉をいただき、これからも命ある限り、少年達のためにこの活動を頑張って続けて行く覚悟を決めました。 中本 忠子



▲子供達との会話集会



▲食べて語ろう会スタッフと参加した子供達



▲食べて語ろう会で調理を手伝う子供達



▲食べて語ろう会に参加した子供達



▲食べて語ろう会の食事風景



▲食べて語ろう会を見学する外国人団体



▲中本さん宅での子供達の食事風景①



▲中本さん宅での子供達の食事風景②



▲中本さん宅での子供達の食事風景③

社会福祉法人 カリヨン子どもセンター



東京都

昭和62年からいじめ、不登校、虐待、少年犯罪などの電話・面接相談「子どもの人権110番」などで子どもの人権救済活動に携わっていた坪井節子氏（弁護士）が、日本で初めて平成16年6月に今日眠る場所のない子や家に帰れない子どもたちの緊急避難場所となる「子どもシェルター」を開始。以来10年程で、シェルターにやって来た子どもたちは、310名。活動は自立援助ホームを運用するなどさらに拡大している。これらの活動がモデルとなり全国的な広がりを見せ、現在12法人、8カ所のシェルターが開設され、「子どもシェルター全国ネットワーク会議」として展開されている。

理事長
坪井 節子

このたびは、貴重な社会貢献者表彰を頂戴し、誠にありがとうございます。

カリヨン子どもセンターは、東京都内で、虐待をうけるなどして家庭や社会に安全な居場所がないハイティーンの子どものため「子どもシェルター」と「自立援助ホーム」を運営しています。豊かな日本の社会でも、暴力や暴言、性的虐待、育児放棄（ネグレクト）を受け、衣食住、心身の健康や教育の機会が守られていない子どもたちが大勢います。公的機関である児童相談所は年間8万件を超えて増え続ける虐待相談に対応し、一時保護所はパンク状態です。

「親に“死ね、お前なんて生むんじゃなかった”と言われて育ってきた」「相談できる人が周囲におらず、小さな頃からずっとひとりで抱え込んできた。高校生になってやっと家を出た」「世の中の誰も信用しない。自分はいつ死んでもいいんだから、誰を傷つけても何とも思わない」…子どもたちの孤独で切実なSOSが寄せられ、2004年に日本で初めて子どもシェルターを開設して以来、320名を超える子どもたちを受け入れてきました。

子どもシェルターではスタッフが常駐し、すべての子どもに担当の弁護士がつきます。児童相談所、福祉事務所、保護観察所、病院等の関係機関と子どもを中心にしたスクラム連携を組み合わせながら、これまでの環境を見直し、これから生活する場所を考えていきます。長らく医療や教育の機会を奪われてきた子どもも多く、家庭的で安全な生活のなかでこれらのケアにもあたりながら、子どもたちに「ひとりぼっちじゃないんだよ。あなたは大切な人。一緒に考えよう」と語りかけています。

また、子どもシェルターに逃げてきた子どもの8割は家庭に戻ることができず、児童福祉施設等へ転居していきます。暴力の荒波から救い出されても、虐待の後遺症として精神的な不調を訴え、すぐに進学や就学を目指すことが困難な子どもたちもお

り、それからの人生も多くのサポートを必要とします。カリヨン子どもセンターでは、17名の職員、20名のボランティアスタッフが従事し、日々子どもたちと共に悩み、喜び、彼ら彼女らが自分の人生を取り戻し、自らの足で歩いていけるようになるまで伴走しています。

こうした小さな活動にご関心を寄せて下さり、大きなお励ましを頂戴した思いです。どうぞ皆様のお近くに、今晚帰るところがないと困っている子どもがいたら「子どもシェルターがあるよ」と教えてあげてください。またそこから再出発しようとする子どもたちの姿をどうかあたたかく見守っていただければ幸いです。

理事長 坪井 節子



▲センターの前にて



▲ピース！



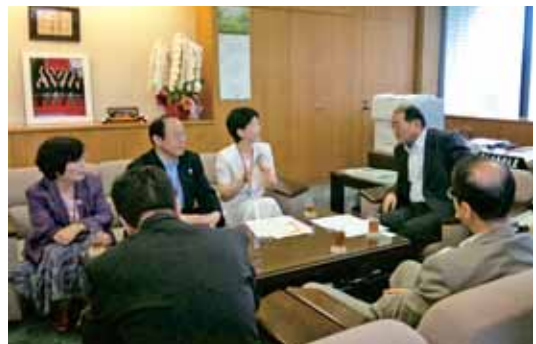
▲クリスマス会



▲クリスマス会



▲座談会



▲厚生労働省陳情

認定 NPO 法人 自立生活サポートセンター・もやい



東京都

東京都新宿区を拠点に平成13年から「ホームレス状態にある人が、アパートで新生活を始めるための暮らしの基盤作りを手伝う」活動を行っている。具体的にはホームレス状況に置かれている人の連帯保証人を引き受け住居を確保し、共通の課題を抱える当事者同士の交流を通じて、社会的な孤立の解消を目指している。新しい生活を始めるための「入居支援事業」、様々な相談に応じる「生活相談・支援事業」、社会的な孤立状態を解消するための「交流事業」、行政に的確な提言と社会の理解を得るための「広報・啓発事業」を行っている。

(推薦者：Dream World 大畑 敦志)

理事長

大西 連

このたびは、社会貢献者表彰を賜り、感謝しております。このような荣誉ある賞をいただき、団体を代表しまして、御礼を申し上げます。

私たち「自立生活サポートセンター・もやい（以下、もやい）」は、2001年に設立しました。ホームレス状態の人がアパートに入るための支援をしたい、その想いで、都内で支援活動にいそしんでいたメンバーで話し合い、「ホームレス状態の人がアパートに入居する際の連帯保証人を引き受ける」という活動をスタートさせました。

もちろん、見ず知らずの、家族でもない人の「連帯保証人」を引き受ける、という活動は非常に大きなリスクをとまっています。もし、家賃を滞納してしまったらその肩代わりをしなければならない、失踪してしまったら引き払い等を負担しなければならない……。しかし、実際に連帯保証人の引き受けを始めてみて、予想よりもそういったトラブルが少ないことに驚きました。駅や公園、公共施設の敷地などで寝泊まりしているホームレスの人たちも、家族との縁が切れネットカフェで寝泊まりする人たちも、DV（配偶者間の暴力）から逃げてきた女性も、児童養護施設出身で身寄りをもたない若者も、実際にさまざまな支援を利用することにより、そして、私たちが連帯保証人を引き受けることにより、多くの人は地域で安定した生活を送ることができるようになりました。私たちが小さなマンションの一室でスタートさせた連帯保証人の提供は、結果として約2,300世帯の人のアパート生活につながったのです。

とはいえ、なかには、生活の維持に困難をきたしてしまう人も存在します。私たちも居場所作りなどのさまざまな事業を展開することでその解決を目指していますが、まだ十分とは言えない状況でもあります。ですので、課題が多い中での受賞は、大変恐縮でもありますが、私たちの活動を評価していただいたことに感謝しています。

今回、社会貢献者表彰を賜り、ほかの受賞者、受賞団体の各活動を知ることができ

ました。私たちとしても、地域のさまざまな活動に支えてもらいながら、この15年間、チャレンジを続けてまいりました。こういったご縁を力に、私たちらしい切り口で、今後も「貧困を社会的に解決する」というミッションのもと、活動を展開していきたいと思っております。

私たちの挑戦に、今後ともに、ご支援、ご協力をいただければ幸いです。

理事長 大西 連



▲もやいの看板



▲誰でも参加できるサロンの風景



▲生活困窮者からの生活相談を受け付けている



▲ホームレス問題について学校で授業



▲居場所づくりの活動であるサロン・ド・カフェこもれび

望海地区在宅サービスゾーン協議会



会長
尾松 芳輝

兵庫県

兵庫県明石市の中心に位置する望海地区で、平成7年に保健医療福祉の専門職と行政と住民がネットワークを組んで設立された協議会。高齢化、認知症、独居、コミュニティの崩壊、学校崩壊、予想される災害の被害等を解決しようと模索する中で、効果を発揮した「地域劇」の公演を同11年から毎年開催している。地域の課題を住民が物語にして、住民が監督、役者を務め、住民の前で演じる。きっかけは、何度説明しても理解されない介護保険制度について、在宅介護支援センターが制度を簡単な寸劇にしてみたところ「よくわかった!」と大反響を得たところから。この結果から「ぼうかい劇団」が立ち上がり、悪質商法、老後のいきがづくり、認知症予防、まちづくりなどさまざまな問題に取り組み、課題を住民みんなで物語に変え劇にすることで、参加者に強い連帯感が生まれ、劇が終わっても引き続き課題を解決しようとする更なる活動につながるといった効果を生み出している。

(推薦者：望海地区在宅サービスゾーン協議会)

この度は、当団体にこのような素晴らしい賞をいただきまして、誠に有難うございます。これまで続けてきたことが間違っていなかったのだと、授賞式が始まって、しみじみと実感いたしました。同時に、共に活動してきたメンバーや地域住民の力があってこそその受賞だと再度心に刻みました。また、ほかの受賞の方々の功績に触れることができ、まだまだ私たちも頑張ろうと心新たにいたしました。

思い起こせば、地域の課題を劇にしようと思い立ったのは平成11年。介護保険制度の改正で地域の高齢者たちが大混乱のなか、いかにわかりやすく説明するかに至った苦肉の策でした。小さな文字が見えない、説明が聞こえない、何度聞いても忘れるなど、高齢者の方に新たな制度の理解を求めるには、困難を極めました。あるとき、広い公民館のマイクがない説明会。「これはだめだ…」と急遽、寸劇にしたところ「今日の説明はよ〜くわかった」と大盛況。そこで気が付いたのです。情報は伝わってこそ役に立つ。情報を理解できるように伝えてこそ専門性といえるのではないかと。そして、単に専門職だけが寸劇をするのではなく、地域住民が劇団員として「ぼうかい劇団」を結成し地域劇を始めたのです。それからは、「会議をやめて劇にしよう」と地域の座談会等に参加して、住民の小さな声に耳を傾け、何が一番課題なのか、地域の旬なエピソードを物語にして語られた言葉そのものをシナリオにする、そのシナリオを地域の住民で何度も作り直す。これで地域の課題がみんなに理解できる。最後の幕は夢を語りながら完成する。そして、約2か月かけて夜や休みの日に行政、専門職、住民の隔てなく練習する間に連帯感が生まれる。劇の当日、見に来る住民は身近な話に見慣れた人が演じるので拍手喝さい。そして、劇が終わった後は、「絵に描いた餅」にしない取り組みが自然発生的に行われ、居場所づくりや防災、見守り、多世代交流等、地域の夢がいくつも叶っていく。

私たちの取り組みは、劇を演じることだけではありません。小さな声を聞き逃さないこと、一人ひとりの問題は、地域の課題でもありうることであり、みんなで考えること。そして、地域の夢をかなえること。

今回の受賞は、私たちの新たな出発にしたいと思っています。全国で活動されている他の受賞者の活動にふれ深い感銘を受けました。このような貴重な機会を下さった社会貢献支援財団に感謝の意を捧げるとともに、私たちが生活の拠点を置く地域を、より快適な住みよい場とするために活動を継続し、共に生活する仲間である住民の皆様にご恩返しをいたしたいと思っております。本当にありがとうございます。

会長 尾松 芳輝



▲シナリオ作成風景



▲練習風景



▲市民会館で地域劇の発表



▲地域劇：往診の場面



▲地域劇：地域の火を消さないで



▲地域劇：防災



▲地域劇：防災：火事だー



▲地域劇：防災



▲地域劇フィナーレ

公益財団法人 ふきのとう文庫



代表理事
高倉 嗣昌

北海道

昭和45年に小林静江さんが長年病床にあった妹の死をきっかけにその遺志を受け継ぎ、病気や障がいをもつ子どもたちに本を届ける活動をはじめ、同48年に小樽市内の小児病院内にミニ図書室ふきのとう文庫を開設した。障がい児や幼児が楽しめる「布の絵本」を開発したことは先駆的で日本全国、海外にも知られるようになった活動の一つ。また弱視児童のために字や絵を大きくした絵本や教科書「拡大写本」も作製している。「障がいをもつ子どもにも発達があり、文化を享受する権利がある」という信念のもと40年以上にわたり活動を続けている。平成26年に札幌市中央区に移転し、蔵書は1万6千冊、障がいを持つ子どものための「布の本」「拡大写本」の蔵書は1,100冊を超えている。登録ボランティア110人、布の絵本と拡大写本作りに60人程が関わっている。

(推薦者：遠藤 知恵子)

受賞に思う

当文庫が、心身に障がいを持つ子どもでも楽しく遊べる布の本・遊具を日本で始めて開発し、その普及に長年取り組んで来たことが認められて、このたび受賞の栄をいただきましたこと、誠に嬉しく思っております。

それも関係者を旅費・滞在費丸抱えで東京に呼んで下さったうえ、盛大なる祝宴まで開いていただきまして驚いております。

お陰様で、当文庫からの出席メンバーにとりまして大きな慰労になりましたし、活動拠点である「ふきのとう子ども図書館」新築移転（二年前）に際して力を下さった東京方面の方々に、活動の報告と感謝の意を表明する又とない機会を得ることができました。

大変晴れがましい舞台でしたが、今年受賞の個人・団体を見ただけでも、私共の活動など足元にも及ばないような立派な活動をなさっている方々ばかりで、私共は、まだまだこれからであることを実感させられる場でもありましたし、なるが故にこそ、この受賞を励みとして、今後も地道に活動していく決意を新たにしました次第です。

代表理事 高倉 嗣昌



▲拡大本製作



▲布の本・遊具作成



▲ふきのとう子ども図書館の様子



▲「布の本」を楽しむ子どもたち



▲多目的室でのイベント風景（人形劇）



▲多目的室でのイベント（お話の会）

高島 法子／榎本 恵子



NPO 法人チャレンジャー支援機構
高島 法子



NPO 法人チャレンジャー支援機構
榎本 恵子

東京都

東京都小金井市で、パン作り教室で出会った高島さんと榎本さんは同市で障がい者が仕事をできる場所を提供したいと平成12年に有限会社として「パン工房ノアノア」を始めた。「パン工房ノアノア」では障がいを持った人も、健常者も人として同じ位置づけであると考え、互いに助け合って障がい者の自立活動を支援するとともに地域の福祉向上に寄与することを目的に、パンの製造販売を通じて利用者の工賃の改善と、活動の場が少しでも増えることを願い、一般社会での就労を目指して職業技術が身に付くように運営している。工賃アップへの取り組みとしてパンの具材の多くを内製することで製造原価を抑えるなどの工夫をしている。現在地域の保育園や老人ホーム、

大学生協への配達、農協などにも協力してもらい、9の市区にまたがる22に及ぶ販売先を持っている。平成16年にNPO法人格を取得、同20年に多機能型事業所と認められ、2つ目の事業所「パン工房ノアノア」を開設する。平成23年3つ目の「パン工房モナモナ」を開設。同25年には生活介護グループホームを、26年に生活上の支援を必要とする相談支援を行う窓口「モナモナ相談支援センター」を開設した。

(推薦者：特定非営利活動法人 チャレンジャー支援機構)

高島 法子

今から、20年程前、子育ても終え、当時更年期にさしかかった私は毎夜、10時頃になると涙が溢れ出て「何でこんなに身体が衰えたのだろう、元気者の私がどうしたのよ」と泣きあかしておりました。涙が枯れたころ「これからは、自分とふれ合う人々にやさしくできる人間になることを目標に生きていけば」と天からの声が舞い降りてきて、心が晴れ晴れとした時に水の流れごとく榎本恵子さんとの出会いがあり、今のパン工房ノアノア、NPO法人チャレンジャー支援機構につながりました。

当時、障害者の施設は満足な工賃ももらえず、地域とのかかわりも少なく、まず私達はたくさんの工賃をあげられるようになりたい、障害者の活動の場を広げたい、という事を目標にやってきました。

さて、立ち上げたものの女二人でやるのですから資金面でも大変で、何度辞めようと思ったかしれません。

それで、営業範囲を広げるため2004年NPO法人チャレンジャー支援機構を立ち上げ、徐々に信用も得られるようになり、配達の間所も増えてきました。

2008年東京都の認可を受け、多機能型「就労移行支援、就労継続支援」の施設となり、今日に至っております。

どのような苦しい時でも、資金面でも精神面でも、それぞれの夫の協力がなければ続ける事は出来なかったと思います。(2012年私の夫が、2013年榎本の夫がなくなりました)又私達の事業のためにたくさんの人達が骨身を惜しまず助けて下さいました。

このような栄誉ある表彰を受けることが出来たのも、私達二人の力ではなく皆様のお力添えがあつての事なのです。皆様方にこころより感謝申し上げます。

今の施設は15年も前に立ち上げたものですから、オープンなども「風前の灯火だね」と、思われるくらい古く、広さも充分ではありません。現在、活動の場を広げるため移転も考えております。

新たな目標にむけて、これからもハンディのある人達と寄り添い心豊かに、頑張つてゆく所存でございます。

15年の節目に私達の施設に光をあてて下さいまして本当にありがとうございました。

表彰式に出席し感動と勇気をいただきました。

榎本 恵子

この度、このような栄えある所に招待されてビックリ嬉し！ 夢心地の一夜でした。ありがとうございました。

人の世の出会いの不思議と幸いな交わりの楽しさに魅せられるときでした。

全国各地から集われた方々が、それぞれに生かされている所で、自らに与えられている賜を、こんなにも一生懸命に活かしておられる様子を見聞きして感無量でした。と同時に、また新たな刺激と夢を与えられる時でした。

人それぞれに置かれた所で、ふとした出会いが、その心を動かし今に至る活動の源になっている心の豊かさ温もりを感じました。

15年余り前、障がい者の就労の場の拡がり、彼らが地域社会の中で自立して生活できることを願う一心で、無謀にも女二人で立ち上げたパン工房は、時を経て都の認可を受けた障がい者の就労の場となり、徐々に世帯も大きくなり念願の利用者さんの工賃アップも少しずつ年々実現化し、併せて利用者さんの年齢も高まってくる中で、小さいながらグループホームもできました。ここに至るまで、家族や周りの人たちには大きな犠牲を強いて共に巻きこんできたことも多々ありますが、このような良き理解者に恵まれて今が在ることに改めて感謝の気持ちいっぱいです。

人という字は支えられて立っているもの、その文字通りこの世に生を受けたもの皆それぞれに必要なとされて生かされていること、障がいを持つものも持たないものも共存することで、お互いに引き立て学びあいながら存在していることも仕事をしながら常々感じさせられています。

仲間と共に身体を動かし仕事をしている時は、心の疲れも忘れて楽しいのですが、反面この仕事を動かしていくに及んで、財布を預かる者としては正直しんどい思いで一杯の時が多々あります。でも、この度ここに集われた皆様との交わりを通して、様々な活動をしながら同じようなしんどさを覚えておられる方々もいらっしやることを知って励まされました。

時に自ら嘆きつつ、「でも此処が私の生きる道」と、立ち返らされています。年の瀬近く、この歳にしてまた新たな見聞を広めさせて戴きました。感謝します。



▲左 高島法子 右 榎本恵子



▲開業時の様子



▲地域販売の様子



▲公共機関での販売活動



▲開業時の様子



▲開業時の様子



▲利用者作業の様子



▲利用者作業の様子



▲利用者との対話



▲ちくわパン



▲たかなパン

やすづか学園菱里地域支援委員会



新潟県

新潟県上越市で、平成8年に設立されたフリースクール「～自由の学び舎～やすづか学園（前身：やすづか自由学園）」を学園創立と同時に、その趣旨に賛同した地元・菱里地域自治会の全住民によって組織され、以来20年にわたり、いじめ・不登校に悩み苦しむ子どもたちを立ち直らせようと交流会や農作業体験、草刈り作業や環境整備作業を通して物心両面から支援を継続している。

（推薦者：社会福祉法人 上越市社会福祉協議会）

会長
和栗 昌夫

～自由の学び舎～やすづか学園創立20年の節目の年に、栄えある社会貢献者表彰の受賞を賜り光栄に思っております。

平成8年安塚町時代児童減少に伴い安塚町内小学校の統合により廃校となった、旧菱里小学校校舎を、「いじめ」や「不登校」に悩み苦しむ子供たちのために「心の拠り所」として、全寮制フリースクール「やすづか自由学園」、後に改称され現「～自由の学び舎～やすづか学園」が創立開校され、開校間もなく学園設立の趣旨に賛同した地元・菱里地域11自治会内、各種団体の役員を充て職として「菱里地域支援委員会」が結成され、以来今日まで20年間地域住民の熱意とボランティア精神により、「いじめ・不登校」に悩み苦しむ子供たちを力強く立ち直らせようと、地域住民の理解と協力により学園長の運営方針の下、支援委員会として物心両面に於いての支援活動を実施して参りました。

学園創立以来、県内外より144名の子供たちが自分との葛藤の末、この「学び舎」を選び学園を修学後、自分の目指す高校に進学する者、又、修学前に在籍校に復帰する児童等、不登校からの苦しみを乗り越え、立ち直りそれぞれの道を力強く歩んでいることは、支援を続けての嬉しさを隠しえないものがあります。

しかしながら、今なお多くの子供たちが不登校に悩み苦しんでいる中、家庭の事情等によりこのような施設を利用できない子供たちが多く、施設を利用できる体制を整えたいと願うものです。

この度の、社会貢献者表彰は、今日まで「菱里地域支援委員会」を支えていただきました行政ご当局、菱里地域の方々等多くの皆様よりお力添えをいただいた賜と、心から感謝申し上げ、私たち支援委員会として、今後も地域の皆さまのご協力を得ながらできる限りのご支援を継続して参ると共に、貴、社会貢献支援財団様の益々のご隆

盛をお祈り申し上げます。 会長 和栗 昌夫



▲給食用の野菜を寄付



▲稲刈り



▲収穫感謝祭で餅つき



▲手打ちそば作り指導



▲田植え指導

あさひ福祉作業所



代表
島 武代

山梨県

山梨県北杜市高根町で桑畑を開拓し、障がいを持った2名の青年と島充弘さん武代さん夫妻が昭和52年に始めた福祉作業所。充弘さんは福祉系の大学を卒業し、福祉施設に就職して養護や就職支援をしていたが、当時は制度も確立していなかったことから、仕事を見つけられない人が大勢いた。その現状を知った充弘さんが武代さんと作業所の開設を決意した。国の制度に頼らず、自分たちの力で自立を図る姿勢に多くの人が賛同し、障がいを持った青年も多く集まった。養豚や原木しいたけの栽培を主とし、後に養鶏や工場の合板カット、近隣工場の部品の箱詰め請負もしたが、バブル崩壊後、工場からの受注が減り、運営が厳しくなった。平成21年には充弘さんが亡くなったが11人の青年が意思を引き継ぎ、組織変更などがあったが、作業所は運営を継続しており、国産原料にこだわった焼き菓子や天然酵母パンなども販売するようになった。

(推薦者：GreenT 株式会社)

社会貢献者表彰式典にお招きくださいます心よりお礼申し上げます。あさひ福祉作業所寮生10名とスタッフ共々、素晴らしい表彰式に感激いたしました。

スタッフの方々の行き届いた心配りと大スクリーンを使った演出には、只々感激するばかりでした。

全国49の団体、個人がそれぞれ信念の下、日々取り組んでいることを認識できたことは、何よりの宝物です。

選考委員長であります内館牧子さんの誰もが居場所を求めている、等のお話し心に響きました。

あさひ福祉作業所は、1977年12月に私共夫婦2人と寮生2名から立ち上げ、義弟の応援を得て椎茸栽培と養豚から始めました。

作業所の目的は、以下のようです。

働く意欲を持ちながら働く機会に恵まれない障がい者に就労の場を提供し、彼らが社会的、経済的、精神的に自立できるように援助することを目的に運営されています。彼らがハンディに負けることなく雑草のごとく逞しく成長することを期待して敢えて無認可体制を堅持しています。

この目的を取行するには彼らもよく働き、頑張って私共に付いてきてくれました。浮き沈みのあった経営に追い打ちをかけるように代表の夫が2009年に亡くなり、妻の私と寮生11名が残されました。夫は彼らに仕事の段取りを話してあるから、大丈夫だから、と申してましたが、大黒柱を失ったことは彼らにとりまして心にもぽっかり穴があいてしまい、養鶏、養豚、しいたけ栽培、パン工房の経営が急速に下降線になっていきました。見かねた支援者が、生活部門だけでも公的援助を受けるよう、NPO法人を立ち上げてくださり、現在のNPO法人あさひ、グループホームあさひテレサ

ホームになりました。作業所は支援者の指導を受け、養鶏、シイタケ栽培、パン工房と個人経営で行われています。また、支援者の太陽光発電の設置のアドバイスで売電収入がプラスになりました。その上、ソーラーパネルの寄贈をうけ、グループホームの電気代が賄えるようになりました。

設立から38年、私も彼らも年を重ねました。

20年、30年と共同生活をし、気心が知り合えた者同士、また長年ボランティアスタッフとして関わってくださってる方々と助け合いながら終の棲家をあさひの敷地内に建てることを、今後の目標としていきます。

代表 島 武代



▲30年来続くワークキャンプのメンバー



▲ボランティアの岩永ご夫妻



▲ボランティアの方々と忘年会



▲支えて下さった野崎さんと昆さん



▲初期の鶏舎



▲初期は鶏舎の外に放牧地



▲親豚10頭飼育の頃



▲人生で一番エネルギーギッシュに働いた頃



▲島充弘・武代夫妻



▲服部先生指導で鶏舎建設



▲放し飼いの豚？ 放牧地から脱走



▲毎年続くワークキャンプ

肢体不自由児水泳訓練教室 ラッコの会



千葉県

昭和52年に障害児・者のリハビリテーションに開催された短期の水泳教室がきっかけで、継続したいという家族の要望に応じてラッコの会として始められた。肢体不自由児に水泳訓練を行うことで、運動機能や心肺機能の向上、併せて精神面の成長を促すことをめざし活動している。現在、毎週日曜日に25人の子どもとその家族が参加している。現会長鎌田さんは元大学のスポーツ専門家で、学生ボランティアを指導し、肢体不自由児と家族が参加できる海水浴やヨット乗船体験、スキー体験など通常では体験が難しい活動も取り入れていたこともある。39年にわたる活動。

(推薦者：岩根 信也)

会長
鎌田 正弘

肢体不自由児水泳訓練教室（ラッコの会）は、昭和52年に習志野市の広報で参加を募り実施された、4日間の短期水泳教室を発端にして始まりました。

参加されたご家族から継続を望まれて、週1回の水泳教室に発展しましたが、その頃はまだ定期的な障害児・者のための水泳教室は他に類が無く先駆的な存在でした。

それから38年続いてきましたが、この度社会貢献者表彰という大きな賞をいただくことになり大変感慨深く思います。

会の代表である夫が今年3回目の脳梗塞になり、表彰式や祝賀会等に出席するにあたり、財団の皆様、ラッコの会の仲間へ支えていただき、あのような晴れがましい席で賞を受け取ることができました。会場で隣り合わせた受賞者の方々にも助けていただき、受賞の喜びに加えて感謝の気持ちで一杯になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

懇談会では多種多様な社会貢献活動を知る機会となり、人の思いが社会を支えていることを目の当たりにし、尊敬の念が湧き上がってまいりました。

ラッコの会が発足した時、夫は順天堂大学院で「肢体不自由児の水泳訓練効果」を研究テーマに、この水泳教室に水泳指導者として加わりました。

以来ライフワークとして続けてきましたが、なぜこの水泳教室が長く続いてきたのか聞いたところ、「必要だったからだろう」との返事でした。

時の流れの中で多くのものが消えていきますが、必要とされ続けてきたことを宝物のように思います。

会の目的は水泳を通して運動機能の向上と精神面の成長発達を促すことですが、地域社会の中に於いて、身近な施設で、家族、コーチ、仲間と共に充実した時間を持ち、生活の質がより豊になっていることが、必要とされ続けてきた理由のように思います。

もちろん、この水泳教室を続けていくには、多くの方々の協力が途切れなくあったからこそです。まずは、活動場所である千葉アスレチッククラブの協力、そして賛助団体、習志野ライオンズクラブの経済的助成、更にボランティア指導員の努力が3本の柱となって会を支えてきました。そこに子どもの健康や成長を願うご家族が一緒

に参加することで、水泳が無くてはならない生活の一部となり続けてきたということです。

毎週日曜日の水泳教室の他にも、海水浴などの野外活動を行っており、障害の有無を越えて共に楽しみ、つながれる場所であり続けたいと思います。

東京オリンピック・パラリンピックに向けて障害者スポーツの関心が高まる中、ラッコの会のような活動が広まり、障害があっても好きなことが自由に選び参加できる環境が整う事を願います。

会長 鎌田 正弘 (文・鎌田 美奈)



▲泳げた！ (20周年記念誌)



▲CAC プール正面 (千葉アスレチックセンター)



▲海水浴の思い出



▲訓練 泳げるよ！



▲訓練 皆で泳ごう！



▲訓練！ 並んで泳ごう！



▲訓練 3人ラッコで泳ごう！

かたくり工房



会長
田代 すみ子

岐阜県

岐阜県揖斐郡の農山村である谷汲地区では高齢化が進み、耕作放棄地が各所にあったが、地域の高齢の女性たちが荒廃する農地を有効活用して地域の特産品作りを始めることにし、平成12年に発足した会。資金は無かったことから、廃業した工場の一部を借り、中古の備品を手に入れ、年金を拠出するなどして運営し始めた。味噌、漬物、らっきょう、お餅、惣菜など、安心安全な製品を安価で提供して好評を博し、15年に亘って活動している。また、保育園や小学校での食育指導や近所の福祉施設へ地元産の餅などを届ける慰問活動なども行っている。会員数が減少の一途にあるが、シルバーの輪を広げ、後継者の育成に努めている。

(推薦者：堀口 賢一)

この度は、地方で小さな活動をしている私達工房に、東京「帝国ホテル」において、素晴らしい式典に、ご招待を賜り表彰して頂きましたことを、先ずもって心からお礼を感謝申し上げます。

私達の活動は、昭和50年代に普及センターの指導のもと、月一度の勉強会から始まりました。その後20年間生活改善グループとして、活動をし、時代の変化と共に、起業への気運が高まっていました。ある会合で、起業女性の話を聞き夢の実現に向って、4つのグループで協議会を作り、試行錯誤を繰り返しました。

平成12年5月から、廃工場の一部を借りて農業婦人クラブの会員17名で、かたくり工房をスタートしました。荒廃する農地を、少しでも守りたいと、米や野菜を作りながら、地元産の食材を活用し、谷汲特産の惣菜、味噌、漬物、餅等を会員達の知恵と工夫により安心安全な「おふくろの味」作りを努めてきました。少しでも、地域に役立つ活動が出来たらと今日まで、15年間頑張ってきました。

現在は、会員の高齢化が進み、退会や死亡もあり、平均年齢は80才近くに達しておりますが、会員の生きがいや、健康づくりの場となり社会貢献活動が出来る事を、一同喜びあっています。今後高齢化が更に進み、耕作放棄地や限界集落が各地に増え続け、工房の存続も厳しい状況になってきますが、50～60才代の会員に、入会を呼びかけ、若者ニーズにあった菓子、ケーキ類等も作り新しい分野にも手を広げて参ります。

また、食育活動の一環として、学校給食への味噌、野菜、大豆等の提供を通して、保育園児、小学生等に、産地地消の大切さ、食の大切さを伝え、次代を担う子供達が、健康で思いやりのある人に育ってくれるよう見守って参ります。

当工房の味噌をはじめとする製品が、身近で活用してもらえ、皆さんに喜んで頂けることに大変な喜びを感じています。今後は、消費税の引き上げもありますが、安価で安心安全な製品の提供を基本に「お袋の味」を広くPRしていきたいと考えています。

一方、資質の向上を図るため交流会や視察研修、講師を招いての衛生講習会等研修にも力を注ぎ、若い会員の増強確保を期待し、頑張っていきたいと思っています。

毎年続けています地域の福祉施設「老人、障害者施設」にも、地元産の餅や菓子等を届け慰問活動を積極的に行い、ボランティアの輪、地域のコミュニティの推進に努

めてまいります。

今回の荣誉ある表彰を契機に、会員一同が一致団結し、小さな工場の輪を広げ、山村の活性化と、社会貢献活動に努めて参りたいと考えています。

誠にありがとうございました。

会長 田代 すみ子



▲工場で作った谷汲特産品・漬物の販売



▲皮むき作業を見学中の子供たち



▲皮むき作業を見学中の子供たち



▲かたくり工房のみなさん



▲食育ふれあい活動



▲障害者福祉施設を慰問



▲ずいきの皮むき作業



▲みょうがぼち作り作業



▲もみじ祭りイベント風景

長野県信鈴会



会長
上條 和男



相談役
今野 弘恵

長野県

昭和38年、信州大学医学部付属病院耳鼻咽喉科看護婦長だった今野弘恵さんが、声帯摘出手術を受けた患者たちの声を取り戻そうと、病院と折衝を重ね、患者たちを説得し、病院独自の発声教室を開設し、その後、長野赤十字病院とも連携し、県の協力もあり、同44年に長野県喉頭摘出者の患者会「信鈴会」を誕生させた。当時は治療が中心で術後のリハビリにまでは手が届いていなかったが、声を失った患者たちに希望と勇気を与え、発足当時は2教室であったが、現在は6教室にまで拡大されている。

全国に口頭癌等によって声帯を失った人は、5万人以上と推計されています。

長野県の例ですと、県内の口摘者は、830名（県福祉課の調べ）居りますが、その中で実に80%の人が喋る、会話をする事を諦めてしまっている、という現実があります。しかし実際に声を出せるのですから一人でも多くの声帯を失ったひとに、声の再生をして、社会復帰を促し希望と自信を持って貰いたい。

声を失った先輩達が、再び声を獲得したその練習方法と、技を半世紀以上に渡り受け継いで来ました。

声を失ってしまえば、聴くことは出来ますが、返事が出来ません。親切を受けた時でも、ただ会釈するしか方法が無い人に、声帯が無くでも会話出来る、それを習得することによって、その後の人生の、生活の質が上がり、手術以前の生活を取り戻すことが出来るそれを伝え、訓練をしております。

この会で行っている内容は、ピアケアー（同じ障害を持った人が、同じ障害の人をサポートすること）が基本です。

もう一つ大きなことは「心」の問題です。手術の傷と同じ様に、非常に大きな心の傷が残ったまま退院して行かざるを得ないのが現実です。最初に、発声教室へ来たときなど、暗く前かがみだった人が、少しでも声が出だすと、背筋がピンと伸び、表情が段々明るくなって行く。



▲発声練習風景①

その姿をその都度拝見させて頂いております。

絶望の淵から、明るく前向きになって行く、その場に立ち会える、幸せを一緒に感じられる瞬間です。

生きることに負荷を抱えている人達は、幸せを受け止める「心の入れ物」が大きいと実感する時です。

社会貢献者表彰の受賞に際し、心より御礼申し上げます。

私達は発声訓練の活動をさせて頂く事によって、自分が知らなかった他の色々な社会を知る事が出来たり、そしてこの受賞という大きな経験をさせて頂きました。食道発声法という私の声を通じると信じて下さり、受賞者を代表して挨拶をさせて頂けた事は、（君の声は世間で通用するよ）と勝手に思い込んでいます。財団スタッフの皆様の温かい応援と決断に深く感謝をいたします。

声帯を無くした人達を励まし勇気づけられたことに、喜びを感じております。

ありがとうございました。

会長 上條 和男



▲発声練習風景②



▲発声練習風景③



▲発声練習風景④



▲発声練習風景⑤

豊能障害者労働センター



大阪府

大阪府箕面市で、養護学校を卒業する予定の脳性麻痺の少年が、「行き場がない」と訴えたことから、昭和57年に築30年の民家を事務所にし、障害者2人を含む6人で、粉石けんの袋詰め、販売を手始めに豊能障害者労働センターが始まった。それから33年、現在は障害者37人を含む55人が活動を続け、リサイクル事業としてショップ4店舗を運営し、オリジナルTシャツの通信販売事業、飲食店、点訳事業等を行なっている。これらの事業収益と同市独自の「障害者雇用助成制度」に基づく助成金によって重度の障害者を含むスタッフ全員に最低賃金以上の給料を生み出している。また、阪神・淡路大震災や東日本大震災の被災障害者支援にも、バザーを開催するなど、取り組んでいる。

(推薦者：箕面市健康福祉部障害課)

代表
小泉 祥一

今回、思いもかけない受賞にとまどいながらも、慣れないスーツに身をかためて電動車いすを駆使する汗だくの代表と、「知的障害」と呼ばれる若手女性スタッフ、介護者を含め、5人で東京へ向かいました。緊張した気持ちで参加した式典では、さまざまな場所で制度や行政の届かない分野で活動を続けておられる方々の紹介があり、「何とかしたい!」という強い気持ちが社会を変えていく原動力になるということに私たち自身も勇気づけられました。

障害があっても「あたりまえの市民として生きたい!」という設立当初の思いは、33年たった今も揺らぐことなく豊能障害者労働センターの活動の柱として息づいています。

障害者の「働く」権利を保障する制度が位置づいていなかった当時、豊能障害者労働センターは、保護・訓練される対象ではなく、住み慣れた地域で働いて所得を手にしたという思いで廃油から作った粉石けんの販売をすることから始まりました。私たちは箕面市行政に働きかけ協働し、福祉の中で労働に軸足を置き、障害者に最低賃金を保障する制度を全国に先駆けて確立したのです。

33年経った今、障害者をとりまく状況は、制度が整ったように見えますが、多くは「労働者」ではなく「利用者」として福祉サービスを受ける対象という位置づけにとどまっています。「就労支援」や「職業訓練」を経て一般就労する障害者はほんの一握りであり、福祉の制度内で地域で自立して生活していけるだけのお金を稼ぐことは非常に困難であるというのが現状です。

私たちは、仕事に人をあわせるのではなく、その人にあった働き方を考えてきました。その結果、地域に5つの店舗をつくり、障害者がお店を担い、また、障害者がデザインしたTシャツ等のオリジナル雑貨を通信販売というかたちで全国に販売する今の形

ができました。障害のある人もない人も全員「職員」として共に支えあい、それぞれの個性が発揮できる働き方を模索し続けています。

あわせて、被災障害者支援、地域の団体や学校との共同企画等、事業を通じてさまざまなつながりを紡いでいきたいと思えます。

今後も、ひとり一人が主役になれる社会を願って地道に活動を続けていきます。

本当にありがとうございました。

代表 小泉 祥一（代筆：田岡 ひろみ）



▲会議風景



▲制作風景



▲事務所作業風景



▲みんなで作る春のバザー



▲着物地で葉書制作



▲東北関西交流祭

ファイナルステージを考える会



代表世話人
岩崎 瑞枝

福岡県

余命告知を受けた癌患者や難病を抱えた人が、人生最後の舞台を人任せではなく自分で企画し、良き死を迎えるために、医療や看護のすきまを埋める組織として、平成6年に、当時癌により余命6ヶ月を告知された小山ムツコさん（同12年に57歳で死去）と、麻酔科医（ペインクリニック開業）の清水医師らによりボランティア団体として福岡市で発足。22年目を迎える。活動内容は①患者やその家族の悩み苦しみに寄り添って聴く傾聴②デイホスピスの運営③毎月定例のグリーフケア「なごみの会開催④保育ボランティア⑤模擬医療面接の際の患者役を養成、派遣の為の模擬患者⑥ハウトケア（手足のマッサージ）など。

このたび社会貢献者表彰を授賞することができましたこと、大変うれしく思っております。私たちの活動を見守って支援してくださっている多くの方のおかげと感謝いたしております。

ファイナルステージを考える会は、末期がんの生活（暮らし）を支える会として平成6年（1994）に福岡市で発足し22年を迎えました。発起人の一人故小山ムツコは乳癌からの骨転移で末期の告知を受けておりました。当時治療に反応しなくなった末期のがん患者はベッド上で人生の最後を送ることが多かった中、小山は人生の最終舞台（ファイナルステージ）は人任せにせず自分らしく暮らしたいと願いました。そして、死にいく気持ちを聴く傾聴ボランティアの養成、必要な情報の発信、例えば、痛みの上手なとり方や最後の場所の選び方、食事の工夫や旅行に行く為のヒント等を提案しました。その願いは「余命6カ月から読む本（海鳥社1998初版）」に集大成されました。

小山没後、私たちは時代のニーズに合った末期の暮らし方を模索しながら支援する活動を続けております。授賞に際しDVDで紹介していただいたデイホスピスは、抗がん剤の精度が上がった事により在宅で治療を続ける末期がん患者さんの生活の支えとして平成19年（2007）にオープンしました。今では利用してくださる患者さんたちの楽しみと共に家族のレスパイトケア（介護疲れの息抜



▲屋久島にて

き)に役立っているようです。

22年経って末期の暮らし方の選択肢は広がりました。でも大切な事は変わっていません。人生の最終舞台(ファイナルステージ)を人任せにせず自分らしく暮らすためには、「医療」や「治療」だけではないファイナルステージを生きようとする事だと思います。そう思う患者さんたちの自分らしさをお手伝いしているのが、当会の活動の機軸だと思っています。DVDの後半で、毎年患者さんと行く10月屋久島旅行の映像が流れました。深緑の森で患者さんがおっしゃいました。「くよくよしたってしょうがないのでこれから先もいつものように笑顔で明るく楽しく生きていこうと思っています」

授賞式前夜そして当日と緊張する場面もありましたが、自分たちの活動も含め他の受賞された方々の活動内容がていねいに紹介され、これほど多くの方々が多方面でそれぞれの活動で社会貢献されていることを知ることができたことは大きな体験になりました。これからの私たちの活動のエネルギーとさせていただきます。そして受賞された皆様のこれからのますますのご活躍も祈念しております。

代表世話人 岩崎 瑞枝



▲利用者さんの団らん風景



▲ご夫婦でデイホスピスを利用



▲屋久島の説明を受ける



▲デイホスピスで利用者が制作

うつろ木ファミリー



鉄板焼き・お好み焼き
「うつろ木」店主

西村 伸

広島県

広島市安佐南区緑井地区の西村家は自宅兼店舗お好み焼き店「うつろ木」を営んでいたが、平成26年8月20日に広島市で発生した土石流災害で、自宅が床上まで埋もれた。事態を心配した友人や常連客が駆け付けたが、自宅や店舗の片付けよりも「地域の復興が先」と駆けつけてくれた人々と地区の復旧を行なった。やがて同家はボランティアセンターのようになり、平日は100人、休日は400人もの人が各地から集まるようになった。地域を回ってボランティアを必要としている家を探したり、県外からのボランティアの受け入れ拠点となったり。ボランティアに必要な資器材を調達、ボランティアへの炊き出しなどを行った。この活動は支援要望が殆ど無くなるまで継続され、ようやく店舗再開へ向けて乗り出し、昨年12月に営業を再開した。同家は災害復旧工事関係者やボランティアの人たちからいつのまにか「うつろ木ファミリー」と呼ばれるようになった。

(推薦者：中井 聡)

今回、平成27年度社会貢献者表彰というすばらしい賞に推薦頂き、授賞式の場に立てたことを大変光栄に思います。

平成26年8月20日未明に起こった広島土砂災害、広島市安佐南区緑井で私たちも予想していなかった経験をしました。幸いなことに家族は無事でしたが、今後どうしていいのかと途方にくれました。そんな私たちの元に、土砂で歩く道もない、雨も降り止んでない中にもかかわらず、たくさんの友人や常連のお客さん達が集まってくださり、「何かできることはないか?」「お店の再興を!」と声を上げてくださいました。ただ、復旧・復興作業をするにしても、この地に根付いて店を続けるならば、「まずは自分たちができる範囲でも地域の復旧作業を先に」と思い、そんな思いにみなさんにも賛同いただき、そのつながりがさらにつながりを呼び、たくさんの支援をいただきました。

復旧作業のことを振り返りますと、災害直後は駆け付けてくださった人に「何をしたらいいか?」と聞かれても、本当に何からしていいのかかわからず、ただ戸惑ったり、いろいろなところで衝突したりもしました。そんな中で、見ず知らずだった私たちにずっと寄り添ってくださったり、根気強く前向きなアドバイスをくださったりして、徐々に活動の形になりました。多くの人たちに出会い、たくさん印象に残っていることはありますが、連日1万袋を超える土嚢袋リレーで長い列をつくった事は、人が力をあわせたときのパワーやその思いを強く感じたことのひとつです。

それから、行政による復旧作業も進み、その年の12月には「うつろ木」を再開することができたこと、たくさんの仲間がまた集まってくれたこと、「うつろ木」のことだけでなく地域のことも気かけ続けてくれていることが、振り返った時にこのような活動をしたことが、少しは地域社会に貢献できたのではないかと、今では感じています。

私たち家族のことをみなさんが「うつろ木ファミリー」と呼んでくれていますが、私たちとともに歩んでくださった方々すべてが「うつろ木ファミリー」です。「うつろ木ファミリー」を代表して、今回の受賞に感謝し、みなさんの温かい思いに改めて感謝いたします。

西村 伸



▲被害の様子



▲再開された「うつろ木」



▲かけつけたボランティア



▲土砂災害



▲復旧作業



▲当日の様子



▲ボランティア活動中



▲リレー活動

認定 NPO 法人 うりずん



栃木県

栃木県宇都宮市で、医療的ケアが必要な重い障がい児者を日中預かることで、その家族を支援する「レスパイトケア」を行う施設として平成20年に設立された。同県内で唯一民間の診療所が行なっているレスパイトケア施設。同市で外来診療、在宅医療を行うクリニックを運営する高橋昭彦医師が、在宅医療を行う中、24時間子どもにつきっきりで介護しなければいけない状況を目の当たりにし、日中重い障がいのある子どもを預かって家族の負担を軽減しようと、運営の困難を承知の上始めた活動。民間財団の助成を受けて事業を始めたところ、同市が関心を示し、事業委託先となったが、利用者の立場に立った「臨機応変な対応」ができる施設を心がけているため、財政面では負担も多く運営は厳しい。利用者のニーズに合った運営を行うため、規模を広げて新しい拠点をつくる計画を進めている。

理事長

高橋 昭彦

「日々の暮らしのその先を」

平成27年11月30日、公益財団法人社会貢献支援財団主催の社会貢献者表彰式に出席させていただきました。瑤子女王殿下のご臨席のもと、安倍昭恵会長から直々に表彰していただき、大変感激いたしました。

医療の進歩により、多くの小さな命が助かる一方で、人工呼吸器、経管栄養などの医療的ケアが必要な子どもが増えています。このような子どもが退院するとひとりの親（多くは母親）が仕事を辞めて介護をしなければなりません。片時も休むことができない介護の現状をみて、何かできることはないかと始めたのが、日中数時間お預かりするレスパイトケアでした。研究事業として始めた預かりは採算性が厳しく、これだけでは存続が困難でしたが、宇都宮市が日中一時支援の特別な制度を創設し、平成20年度から事業としてうりずんを開始することができました。今回の受賞は、子どもとご家族、支援者の皆さん、そして日々支えてくれているスタッフを代表していただいたものと思います。

現在、うりずんは特定非営利活動法人となり、4つの市町から33名の障がい児者が日中のレスパイトケアを利用されています。ホームヘルパーが自宅や移動中に介護を行う事業も始めました。しかし子どもと家族が普通に暮らせる状況には程遠く、通学の負担、授業中は親が学校に待機を求められたり、修学旅行や遠足なども親が参加しないと行くことができない、など厳しい現実があります。親なき後の問題も重い課題です。

もう少し地域のお役に立ちたいという思いから、公益財団法人日本財団様の助成を得て新しい拠点の建設が始まりました。平成28年3月にはうりずんの新拠点が誕生し、児童発達支援や放課後等デイサービス、居宅訪問型保育など新しいサービスも始める予定です。お世話になっているすべての方に心より感謝申し上げます。

受賞された皆様の活動はどれも素晴らしいものですが、特に広島県で「空腹が子どもを非行に走らせる」と、保護観察中の少年たちに長年の間、毎日ご飯をふるまう活動をされている中本忠子様への活動には胸打たれました。やはり、日々の暮らしの中に答えがあると感じました。皆様とご一緒できたこと、光栄に存じます。

今後も、どんなに重い障がいがある子どもも、その家族も普通に地域で暮らしている社会を目指して活動を続けていきます。このたびは誠にありがとうございました。

理事長 高橋 昭彦



▲お楽しみ会 はいどうぞ



▲絵本読み聞かせ どんなお話かな？



▲みんなで遊ばしよ



▲動物園見学でキリンにえさやり



▲動物園見学会集合写真



▲ハイ、ポーズ！



▲節分 鬼は理事長が務めます



▲ひな祭り お内裏様とお雛様です

草柳 和之



東京都

平成9年から、自ら主宰する心理相談機関「メンタルサービスセンター」を通じて、未開の領域であったDV加害者更生プログラムに着手した。同11年には岩波書店からDV加害者に関する日本で初めての本を出版した。草柳さんが提唱した専門用語「加害者臨床」は2010年代に入り、多くの専門家が使う様になり、専門誌への執筆や学術集会での講演。研修も行っている。DV防止の啓蒙活動にも関与し、DVカルタの作成やDV根絶を呼びかけるコンサート活動を行ってきた。20年近く、加害者の更生、被害者のカウンセリングや裁判支援、DV防止の社会活動に一身に取り組んできた。

(推薦者：鈴木 真吾)

この度、長年のDV（ドメスティック・バイオレンス）問題を中心とした幅広い実践活動が評価され、平成27年度社会貢献者表彰をいただくことになり、誠に感謝申し上げます。

思い起こせば、精神科の病院臨床から心理臨床家としての歩みを始め、幾つかの大学で非常勤講師として教壇にも立ってきましたが、その道の半ばから家族内トラウマの問題に力を尽くすようになりました。DV被害者支援に携わったのも早期の部類でしたが、私が1997年に加害者更生プログラムの実践・研究に着手したのは、我が国で最初であり、加害者に関する著書を1999年に刊行しましたが、それも本邦初のことでした。2015年12月現在、加害者自助グループは月2回・2時間で250回以上の例会を開催、DV克服ワークショップ（加害者の集団心理療法）は土日・年4回、65回の開催を数えます。本当に、よくも続いたものだと思います。

しかしその道程は容易ではなく、多くの人々から事実無根の誹謗中傷・妨害・嘲笑・無視が執拗なまでに向けられ、それらによる心労は並大抵ではありませんでした。講演の際に罵声を浴びせられる出来事、共同の講演者や主催者からの無礼千万な言動、迷惑電話等は言うに及ばず、身の危険を感じる瞬間、果ては警察を利用した嫌がらせまでありました。しかも、これらの負担を私個人が一手に引き受けるしかなく、余りのことに、この領域から撤退しようと思ったことも、一度や二度ではありません。

それでも当方は質のよい臨床を探求することをやめず、行き詰まっては新しいアイデアを生み出し、活動を発展させることに専心しました。活動の広がりとしては、離婚裁判の際に被害者の意見書を執筆するという責任の重い仕事をはじめ、加害者の心理療法理論の開発と体系化／12冊に及ぶ本（共著を含む）の執筆／幾多の学会発表／臨床家のトレーニング実施／DV防止法の制定・改正の際、省庁や関係議員へのロビー活動／国連NGOレポートの執筆／ピアノ演奏を通じてDV防止や平和を訴える

音楽活動（国内だけでなく海外にも足を伸ばすことになった）、など、個々に列挙しきれない、膨大なものとなりました。得ることが多かった一方で、多くの大切なものを失ったのも確かで、虐待問題の底知れぬ深さを感じさせます。

心理臨床・カウンセリングの分野に身を投じた時点では予想もつかぬほど、遙かな地点まで来ることができました。それも、多くの方々から当方の活動に対するご理解とご協力を頂戴してきたことの賜物です。これから書きたい本も、世の人々のためになる新機軸のプランも、たくさんあります。「領域を超えて行動する心理臨床家」としての草柳和之を、今後ともご理解、ご支援たまわりたく、さらにはご指導、ご鞭達をよろしくお願い申し上げます。

草柳 和之



▲ DV 被害者対応スキルアップ研修会の研修風景



▲カウンセリングルームにて



▲韓国性教育研修の際の写真



▲草柳さん考案のDV 啓発カルタ



▲ピアノ演奏風景 第13回日本心理劇学会大会 懇親会

五色園区自主防災隊



愛知県

愛知県日進市で平成12年に地域自主防災組織として設置され、地域における自主防災訓練の実施、災害時避難行動支援者の掌握、火災予防夜警啓発などを毎年実施し、地域住民に防災意識の普及・啓発活動などを積極的に行い、「防災・減災」をキーワードに地域の繋がりと絆を深め、災害発生時には住民通しが声を掛け合い、助けあう「共助」の意識を浸透させている。15年にわたる活動。

(推薦者：愛知県日進市 危機管理課)

隊長
横井 秀明

この佳き日、瑤子女王殿下のご臨席を賜り第45回を数える平成27年度社会貢献者表彰式典にお招き頂きありがとうございます。安倍昭恵会長より表彰状を頂き又祝賀会においては写真撮影にも応じて頂き光栄の極みです。本当にありがとうございます。

さて、私共「五色園区自主防災隊」の活動についてご説明いたします。

私共が住んでいる五色園は愛知県名古屋市の東隣、平成17年に愛知万博が行われた会場の西隣に位置する日進市にあります。そこは標高100m程の自然豊かな丘陵地に一戸建て住宅1,500戸余りが集まった新興住宅街です。

隊の発足は平成12年4月、当時はいつ来てもおかしくない「東海地震」の発生が心配されていた時期です。今では当隊を含め36の自主防災組織が活動していますが、日進市として第1号の草分け的存在です。

主な活動は

- ① 住宅内の消火栓、消火器をはじめ防災資器材の点検整備
- ② 消火栓を使用した放水訓練
- ③ 毎年10月に行う「南海トラフ地震」を想定した防災避難訓練
- ④ 主に小学生を対象として小学校の体育館に一晩泊って避難所体験をするイベント「学校に泊まる！」
- ⑤ 子供達目線で地域の防災マップ作りに取り組む「こども防災マップ探検隊」
- ⑥ 年末には自治会、子ども会と合同で行う「年末パトロール」
- ⑦ 昼間、夜間、深夜、一年を通して延べ200回程行う青色パトカーによる住宅内パトロール

このような活動を通じ、住民一人ひとりが、自分の身は自分の努力によって守る（自助）、普段から顔を合わせている近隣の人々が集まって互いに協力し合いながら防災活動に組織的に取り組む（共助）の考え方を培っています。

災害時には防災関係機関（公助）が動き出すまで「自分たちの町は自分たちで守る」という強い気持ちを持ってこれからも地域と共に何ができるかチャレンジしていきます。

隊長 横井 秀明



▲防災マップ作り



▲子ども防災マップ



▲消火訓練



▲日進市地域総合防災訓練の様子



▲放水訓練



▲放水訓練



▲夜間パトロール



▲夜間パトロール

特定非営利活動法人 かながわ森林インストラクターの会



神奈川県

平成2年に全国に先駆け神奈川県で制定された知事認定資格「神奈川県森林インストラクター」に認定されたインストラクターによって同4年に発足し、同20年にNPO法人に認定された。県の進める「かながわ水源の森林づくり」などに協力し、同県の緑を守り、育てる環境保全を行っており、森林と人をつなぐ県民運動を同県下一円で展開している。植樹や間伐、枝打ちなどの山仕事を指導したり、自然観察や普及啓発イベントの開催などを行っている。

(推薦者：公益財団法人 かながわトラストみどり財団)

理事長

久保 重明

この度は、「かながわ森林インストラクターの会」に栄えある「社会貢献者表彰」を賜り、大変光栄に存じます。またご推薦頂きました（公財）かながわトラストみどり財団、神奈川県森林関連部署の支援の賜と深く感謝申し上げます。

当日、表彰式典、祝賀会に参加して多くの方々から様々な社会貢献をされているお話しをお伺いし深く感銘いたしました。

神奈川県は全国に先立ち平成2年に森林インストラクターの養成を始め、その2年後に第一期生が誕生し、会も平成4年に設立されました。その後、養成機関であった森林財団（現在、（公財）かながわトラストみどり財団）は森林インストラクターのあるべき姿を打ち出すため、平成7年に「神奈川県森林インストラクター検討委員会」を設け、期界の専門家に諮問致しました。その中で「市町村・学校・企業・団体等」「森林・林業専門家や組織」「森林財団」「森林インストラクター会」の4者の一翼を担い、神奈川県のみどりの環境保全と育成を務めるとの方向付けをし、具体的役割として次の4項目に体系付けられました。

- ① 森林づくり・森林の保全育成のためボランティア活動の指導（森林づくり）
- ② 森林と林縁の自然観察を通して森林・林業の果たす役割についてのガイド（自然観察）
- ③ 森林文化やそれを育んできた山村の人々の生活や歴史の紹介（森林文化）
- ④ 都市に住む県民に対する森林林業の現状や課題および都市住民と林業従事者とのかわりの説明（普及啓発）

これを受けて会は平成8年に4部会制となり、設立から16年間任意法人として活動を続け、平成20年に新たな飛躍を目指し、特定非営利活動法人を申請し認定されました。

活動は、県やどりき水源林を中心に学校の自然観察、団体・企業（県の水源林パートナー）の活動である間伐、枝打、下刈など作業、また（公財）かながわトラストみどり財団が県内各地で行う「県民参加の森林づくり」の作業（植栽、竹林整備、間伐、除伐、森林講話など）の技術指導や安全管理などを行って来ました。やどりき水源林の水源林パートナーが増え個々の活動区域が次第に狭くなったこともあり、県は平成21年3月に水源林パートナーの名称を森林再生パートナーと変更し全县に展開するようになりました。会も県の進める「かながわ水源の森林づくり」などに協力し、県のみどりを守り、育てる環境保全を担っており、森林と人をつなぐ県民運動を県下一円で展開するようになりました。平成9年頃の派遣要請は30件程度であったが、ここ数年は150件を超えるまでに至っており、さらに増える傾向にあります。現在、会組織も新たに運用の利便性や世の要請により「森林癒し部会」と3つの事業部会「やどりき事業部会」「ネットワーク活動事業部会」「日本触媒湯河原の森事業部会」が加わりました。会員数は平成27年11月末で約300名となっています。

理事長 久保 重明



▲森林づくり 間伐前のミーティング



▲自然観察 森林探訪



▲森林文化 竹細工



▲普及啓発 街頭キャンペーンの水源涵養実験



▲森林癒し 五感で森を感じる



▲やどりき事業 森の案内人



▲2008年ボランティア間伐作業



▲2009年水源林の集い間伐作業



▲下刈り



▲成長の森

柁美会



会長代行
隅 嘉恭

京都府

京都市で昭和28年から同市の障がい者支援施設大照学園で月1回第4月曜日に利用者の散髪を無料で続けて62年目を迎えた。同市内の理容学校の同期生7人によって、当時聾啞児施設だった大照学園で毎月2回のカットモデルとして入所者の散髪を行っていたことが活動の始まり。一時期は40人の理美容師が会員となっていたことがあり、これまでに500人近くの理美容師が関わって来た。現在の会員は18人。月1度の散髪その他、節目の年には同学園の園児と潮干狩りなどのレクリエーションを行ってきた。

昭和28年に京都理容学校の同期生7人によって柁美会を結成し、同市の障害者施設大照学園で当初は月2回、現在は月1回第4月曜日に園児さんの散髪を今年で62年間続けて来ました。又散髪のほか節目の年には同学園の園児さんたちと奈良公園に行ったり、香良洲浜に潮干狩りへ、又他に色々と柁美会交流としてレクリエーションなど行いました。

62年間地道にコツコツとしてきた事に対し認められ、平成27年社会貢献者表彰式典が東京帝国ホテル孔雀の間にて瑤子女王殿下をお迎えして、公益財団法人社会貢献支援財団安倍昭恵会長の主催により盛大に開会されました。全国から49団体個人の方々が選ばれ表彰されました。

私達柁美会も、京都から選出され柁美会会長代理、他3名代表で参加致しました。

年齢も重ね、今では奉仕活動が出来ない者もいますが、次々と引き継ぎ会員が増え、会員名簿によりますと450人余りになり、継続は力なりとも言いますが、見返りを求めず会員の善意の心が成し遂げた事と思います。

これからも出来る限り、継続してゆきたいと思います。盛大な表彰式にて、大勢のスタッフの方々にリハーサル及び本番に、アドバイス及び適切な指示で表彰式も無事私なりに終えた事に感謝しております。

一生に一度であろう貴重な体験をさせて頂き有難うございました。

会長代行 隅 嘉恭



▲1957年旧名「青美会」でハイキング



▲1989年衿美会家族で海水浴へ行きました



▲1995年11月27日散髪ボランティアに取り組む会員



▲1998年4月27日散髪ボランティアに取り組む会員



▲2014年3月26日 京都新聞

女川1000年後の命を守る会



会長
阿部 由季

宮城県

平成23年に発生した東日本大震災で、宮城県女川町は43.7メートルの津波により住宅の9割が被災し、873人が死亡・行方不明となった。その中で震災の年に女川第一中学校に入学した生徒たち64名が、社会科の授業で「愛するふるさと女川に出来ることは何か…」と考え始め、同年11月①災害時に住民同志が助け合える絆作り、②広い避難路と高台の町づくり、③震災を記録に残す、の3つの対策を実現させ、「1,000年後の命を守ろう」と活動を開始した。その願いの一つとして、町内21ヵ所の全ての浜に津波の襲来を伝え、全ての人の命を守るための「女川いのちの石碑」を建立する計画を立て、目標となる1,000万円の募金を同25年2月に開始し、半年で目標額を達成。同年11月に最初の石碑を完成させた。中学校を卒業した現在も約20名が石碑を9基完成させ（残りは高台集団移転が完成後）、震災時にいただいた多くの支援の恩返しとして、自然災害から人々の命を守る『女川いのちの教科書』をつくり、日本、そしてアジアの国々に届けようと活動を続けている。

「社会貢献者表彰を受賞して」

11月30日、大勢のご来賓の皆様にご臨席いただき、東京帝国ホテルで安倍昭恵会長から表彰された感激と興奮が未だに続いております。また、長年の素晴らしい取組を積まれた受賞者の皆様から、周りの人のため、より良い社会作りのため何ができるのか等、貴重なお話をたくさん教えていただきました。同時に、数十年も地域社会を支え、日本をリードしてきた方々と同じ席に着かせていただけたことに恐縮するばかりでした。

私たちの合言葉は、「1000年後の命を守る」です。中学1年生の社会の授業を通じて、自分たちが東日本大震災で経験した辛く、悲しい体験を二度と繰り返したくないとの一心でこの5年間活動を続けてきました。津波から全ての人の命を守る方法として「①絆を深める、②高台へ避難できる町づくり、③津波の記録を残す」、の3つを実現させようと様々な活動をしてきました。浜の人や町を初めて訪れた人たちと一緒に津波からの避難訓練を実施しました。また、町内にある21の浜全てに津波到達地点よりも高い所に津波からの避難を呼び掛ける「命の石碑」を建てるため100円募金で1,000万円を集める活動等を行いました。

そして、大震災で日本中、そして世界の多くの方々から私たちがいただいたご支援の御礼の一つとして、高校に進学してから毎月2回程集まり『女川命の教科書』作りを行っています。それぞれが違う高校で勉強や部活動、学校行事等も異なるため、集まる日や場所を決めるだけでも毎回苦労の連続です。年末には合宿しながら、教科書の原稿を書いています。この『女川命の教科書』は、日本中の海に面している都道府県の全ての中学校、そして、世界中の自然災害で命を失う人の4分の3が集まるアジアの国々の中学生に届け、一人でも多くの人の命を助けていきたいのです。

そのためには、出版社を探して書籍化したり、英語に翻訳したりすることが必要です。また、小学校低学年・中学年・高学年向けの教科書も作っていき、全ての人々が

自分の命、そして周りの人の命を守って
いける教科書にしていきたいのです。高
校では、同級生から「いつまで震災のこ
とを引きずっているの?」と言われるこ
ともあります。しかし、私たちは自分た
ちの命が続く限りこの活動を続けていく
つもりです。1000年後の人たちが再び来
る巨大津波から命を守ることができるた
めに。

「夢だけは 壊せなかった 大震災」
これは女川の中学校の同級生が1年生の
時に考えた俳句です。私たちの夢を1000
年後に実現することができるよう、これ
からもご指導、ご支援をどうぞよろしく
お願い致します。 会長 阿部 由季



▲2011.03.11 17時08分 女川町



▲2013.02 初めての募金活動 女川町



▲2013.10.19 石碑の製作現場にて



▲2013.04.18 修学旅行での募金活動



▲2013.11.23 第1 基石碑完成式



▲2013.11.23 第1 基石碑の完成式

高橋 美知子



岩手県

盛岡市の公民館の一角に図書室「うれし野文庫」を開設して以来、40年間近く子どもの本にかかわる活動に携わり、岩手県を中心に青森、秋田の各県で子どもたちにストーリーテリングや読み聞かせを、また大人には子どもと読書の大切さについて講話や講座を行っている。そのようななか東日本大震災に遭遇し、とりわけ陸前高田市では市立図書館が全壊し、館長ら職員7人が犠牲になった。高橋さんは「この街に何ができるのか。子どものための小さな図書館なら作れるのではないか」と思い、同市に小さな図書館を作るための活動を開始した。その後、市側から用地の提供を受け、2つの団体からの助成も決定し、トレーラーハウスによる子ども図書館「ちいさいおうち」を平成23年11月25日に開始した。「ちいさいおうち」は開設以来の利用者が約15,000人を超え、寄付等により蔵書も約4,900冊に増えるなど、被災地の子どもを育む図書館として運営されている。

11月29、30日、社会貢献表彰式の準備と授賞式の2日間、私は48名の受賞者の方々と一緒に時間を過ごしました。中には命をかけて、体を張っての活動をしている方々もいらっしゃり、そのお仕事の内容を知るにつけ、感嘆、感服せざるをえませんでした。同時に同じ舞台に立って良いものかとたじろぎました。それは、華やかな2日間で、これほどの厚遇をお受けしたことはございませんでした。

思い起こせば、あれは、4月でしたでしょうか、公益財団法人社会貢献支援財団の天城専務理事が岩手県陸前高田市までいらっしゃり、私の40年にわたる活動とこの大震災の地にこども図書館「ちいさいおうち」を作った理由を色々お尋ねになりました。

その時、“社会貢献”という言葉が遠くに感じられたことを鮮明に記憶しております。

そして9月に社会貢献者表彰受賞の決定通知を頂いたときは、まさに、ぽかん！としてしまい、理解致すのに時間がかかりました。それほど、私の中には“社会貢献”という言葉がありませんでした。

40年前、子どもたちに本を読む喜びを伝えたい思いから、ある施設を訪問し、ストーリーテリングと本の紹介を始め、1977年に地域文庫として「うれし野文庫」を開設。2000年に特定非営利活動法人を取得し、「うれし野こども図書室」と改名。そして今に至るまで、厭きることなく様々な形で活動を続けて来ました。

図書室には選書をした本が赤ちゃん絵本からヤングアダルトまで7,000冊以上、所せましと並んでいます。図書室の開館、勉強会、講師を招いての講演会講座などの開催、学校訪問をしてストーリーテリングを広め、子ども達には読書の楽しさを、大人たちには子どもの成長期に大きな役割を果たす読書の力を伝えてまいりました。

2011年3月11日、東日本大震災が起こり、こんな危害が自分の場で起こるとは、正に天と地がひっくり返った思いでした。被災地に通いながら必死に考えました。必要とされ、自分に出来ることは何か！？ 最な答えが返ってきました。出来ることとは、長年培ってきたことしかなく、小さくても良い、安心して落ち着ける子どもの図書館を造ることでした。奔走しました。2団体の民間助成団体が手をしっかり手を差し伸

べて下さいました。もう、まる4年もち、陸前高田市に設置したこどもの図書館「ちいさいおうち」は多くの方々の支援を受けながら地域にしっかり根を下ろしています。

授賞式から時間がたち、今回の受賞をしみじみと有難く感じております。社会を支えている様々な活動の中に、子どもと本に関わる活動を取り入れて下さった事、すなわち「読書」が人間形成上大きな働きを果たしている事への証、表彰はご褒美と取らせていただき、励みとしてこれからの活動の糧にして参ります。ありがとうございました。
高橋 美知子



▲盛岡うれし野こども図書室



▲陸前高田市の震災後の市立図書館



▲ちいさいおうち開館式



▲ちいさいおうちの外観



▲ちいさいおうちの館内



▲ちいさいおうちの様子

大石 由紀子



日本画家、法定通訳
国際保護司

兵庫県

神戸市で昭和40年から自宅で英語教室を開く傍ら、平成12年に保護司として活動していくなかで、外国人を金銭で売買し、売春を強要されたり、地域での教職員や公務員による女性・障がい者への性犯罪がややもすると隠蔽されたりすることに心を痛め、自宅に「Oishi サポートセンター」を開設、被害者の女性の心のケアを担ってきた。国内ではソロプチミスト会長としてそのような活動報告を続ける中で、国内外の様々なネットワークにより、広報・啓蒙活動を続け、国際的な活動を行っている。国内外での人身売買防止に向けての法律改正や各種機関の設置が徐々にではあるが進みつつある。

(推薦者：兵庫県議会議員 芦田 賀津美)

ささやかな活動が評価されて何よりの光栄です。ありがとうございます。

私が昭和40年から活動を続けて半世紀を迎える、人身売買の根絶を目指してのテーマは、2004年に大阪アメリカ総領事館でディスカッションされました。

人身売買は不法入国の問題もあり、人を強制的に奴隷状態にしてしまいます。

例えばタイ、フィリピンの少女たちを風俗産業で働かせる、そこには泣きながら訴え続ける彼女たちの姿があります。日本の場合は刑が甘くて売春は暴力団の資金源となっています。

被害者や発見者の詳細の報告の積み上げが成功へと導きます。

貧困の中での女性の自立を促さないといけません。被害者のケアと援助が先が必要です。確固たる保護システムが必要なのです。

考えてみたら、人間はその思い適うように生きないといけない、そこをしっかりと意識しないといけませんね。今この時代に生きている事、命を与えて貰っている事に感謝しています。

その中で社会のための奉仕の尊さとして自宅で「Oishi サポートセンター」を開設し国際的な活動を半世紀も続けております。

国内外での人身売買防止に向けての法律改正や各種機関の設置が徐々にではありますが、前に進んで来ています。

兵庫県会議員の芦田賀津美先生の推薦を頂き、心に響きました。

あと何年生きられるかはわかりませんが、この頂いたご縁を大事にして心から大切に生きたいと思います。

大石 由紀子



▲アジア刑政財団のレセプション



▲アジア刑政財団香港大会日本と中国代表者たち



▲フィリピン少年院を訪問



▲フィリピン保護司大会 マニラ新聞が大きく報道



▲フィリピン保護司大会



▲フィリピン訪問



▲レセプション



▲香港刑務所の内部 はじめての公開



▲香港刑務所の内部 日本人では大石さんらが初めて立入りを許可された



▲香港刑務所の内部



▲日本兵が多く眠るモンテンルパを訪問

特定非営利活動法人 ロバの会



代表
山田 新作

京都府

昭和38年、会の代表者となる山田新作さんが京都市の点字図書館で朗読・録音活動を開始。点字図書館の蔵書を次々と作った後、同50年にボランティア仲間にも勉強会を呼び掛け「ロバの会」を結成。医療や音楽、スポーツ、食事、旅などバラエティーに富んだテープ情報誌「ロバさんの情報ファイル」を全国に発行した事で、利用地域を限定する図書館での活動から独立した。その後、終日電話で聞ける「朝日新聞天声人語」、「郵便局ふるさと小包・全国版」「高島屋通信販売カタログ」を発行、爆発的な反響を呼んだ。ロバの会は、全国に先駆けて録音図書のリニアライズ化に取り組み、テープを全てCD化、視覚障がい者の自立のための医学書・参考書をはじめ、セパメンバー表などは「いつまでも手元に置いて利用して下さい」という貸出しをしている。平成20年にはNPO認可も取得、同22年には文化庁から「視覚障がい者等のための複製又は自動公衆送信が認められる者」の指定を受け、43人の会員は活動を続けている。(推薦者：社会福祉法人 日本ライトハウス情報文化センター)

私ども NPO 法人・ロバの会の創立メンバーにとっては、40年を超える朗読奉仕の最後のご褒美となりました。今後を託す若いメンバーにバトンタッチをするための、嬉しい再スタートに立てたような気がしています。

ほぼ40年前、ボランティアと言えば、点字と朗読…と言う時代がありましたが、最近、情報はパソコンで自分で選べるようになったので、ロバの会は卒業します…というようなご連絡も多くなりました。

各地で制作されたCDを全国の視覚障害者が使えるというネット図書館も活躍していますが、やはり「もうテープは作らないのですか？」という、テープと点字で育て、パソコンもスマホも使えない、今は高齢視覚障害者と呼ばれる方々もまだまだ沢山おられます。

そんな方々に今欲しい情報は？とお聞きすると「近所のスーパーのチラシを読みたい」というような毎日の生活に直結した、切実な返事が返ってきます。

若い方々は自力でどんどん情報を取れますが、それでも日常の身近な情報は反対に少なくなってきているように感じます。

毎日、他人様に「有り難うございます」と声を掛けながら生きていかなければならない生活は、どんなにか自分を抑えて、肩身狭く控えめに生活されていることかと想像できます。

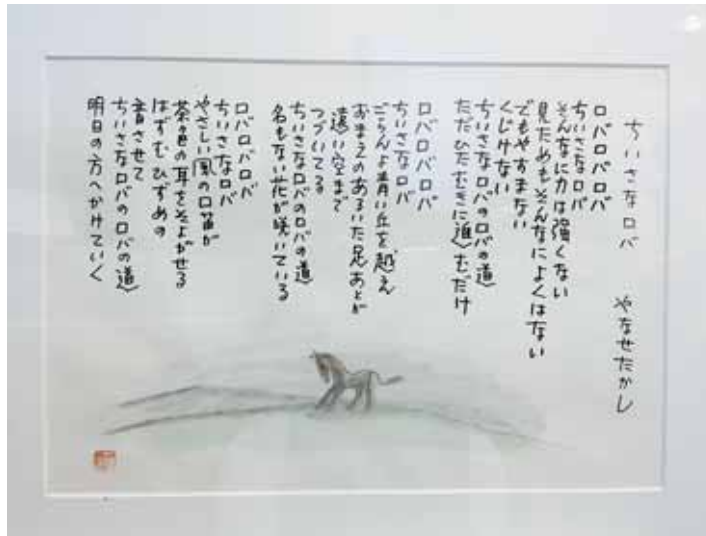
私達ボランティア自身も高齢になり、家族や友人を見送ることも多くなりましたが、そんな時に「ロバの会があって良かった」「集える仲間があって良かった」「CDを送る封筒の手作りなど、小さくても役に立つ仕事があって良かった」とつくづく思います。

賞状式典の間に紹介されたVTRのインタビューも感動的でした。

授賞式に出席して、他の方々の活動を見聞きし、ボランティア活動は人のためではなく、自分の生きる活動源になっていることを再確認させて頂きました。

有り難うございました。

朗読ボランティア 河野 忍み



▲やなせたかし氏が作ったロバの会のテーマソングの歌詞



▲ロバの会の看板（絵：やなせたかし）



▲事務所の活動風景



▲事務所の活動風景



▲事務所の活動風景

鈴木 剛生



東京都

東京都台東区で柔道整復師として接骨院を経営する傍ら、平成14年から近隣の小学生から高校生に無償で格闘技を教えてきた。そこでは学校で教師に暴力を振るうような問題児や不登校児、いじめの被害者にも門を開き、区内の学校の生徒指導にも協力を続けてきた。道場生の中には隅田川でホームレス生活をしていた中学1年生もいたが、その子の父親代わりとなって定時制高校卒業まで援助したこともある。200名以上の子どもに格闘技を教え、その内10名のプロ選手を育てた。格闘技を通じて感謝する心や自分が愛されている事を教え、間違った方向へ行きそうな子どもたちに生きる目標を与えてきた。現在道場は教え子たちが引き継いで活動を継続している。

(推薦者：菱田 慶文)

今回は、このような名誉ある賞を頂き、光栄に思います。この良き機会に道場支援者、関係者の方々に心から御礼を申し上げます。

受賞に際して、私の格闘技指導を振り返りたいと思います。10数年前になりますが、偶然に治療を通して知り合った中学生に「先生、格闘技を教えて」と言われたのが、はじまりです。その子どもがきっかけになり、近所の子ども達が集まり始めたのです。当初、私の経営する接骨院の診察時間が終わると、小学生、中学生が集まり、ベッドを片付け、簡易のレスリングマットを敷いて、練習を始めていました。

私は、柔道とプロレスリングを経験していましたから、その経験を活かして、打撃技と寝技の指導していました。当時は、本格的なプロ選手を作るような気持ちもなく、近所の子どもに格闘技を教えている内に、区内で有名な不良少年も私に格闘技を習いにやってきました。また、学校でいじめにあっている子どもや不登校児などもやってきました。その様な活動をする内に、「プロ選手になりたい」と申し出る道場生も幾人か出てきました。その頃には、参加者の人数も増え、区の廃校になった校舎を一時使用させて頂き、本格的に練習するようになりました。現在は、学校が使用できなくなった為、道場を支援して下さる篤志家の方から、援助して頂き、道場を運営しています。また、現在は、私が、身体を壊してしまったため、現在、プロ格闘技の選手が中心になり、道場の運営を行っています。

現在の私は、思うように自分の身体を動かすことができません。しかし、必ず、身体を元に戻し、元気に下町の子どもと遊びたいと思います。子どもは、遊んであげれば、純粋な笑顔になります。問題行動をおこしてしまう子どもこそ、大人の愛情が必要です。一緒に笑ったり、泣いたりしている内に、子どもは、自分の本当の良さを見せてくれるものだと思っています。今は、弟子がその心を受け継ぎ、また、色々な子どもと遊ぶことのできる大人になって欲しいと願います。

最後になりましたが、社会貢献支援財団に表彰された人々の様な方が日本にたくさん増えることお祈りし、感謝の言葉とさせていただきます。

鈴木 剛生



▲道場にて



▲弟子の伏見さんはチャンピオンに



▲弟子の島田さんはチャンピオンに



▲先生 誕生日おめでとうございます



▲練習



▲たけのこほり



▲鈴木さんを囲んで

笹原 留似子



岩手県

岩手県北上市で納棺や復元納棺の会社を運営している。東日本大震災の後、岩手県北上市から岩手県沿岸被災地に入り、約4ヶ月の間に300人以上の損傷や腐敗の著しい遺体の顔を元に戻すボランティア活動を行った。損傷が激しい遺体のおもかげを探すため目や口の中に手を入れ、4時間程かけて復元した遺体もあったという。笹原氏は復元した人たちの思い出して描いた似顔絵と共に震災を伝える活動も行っている。そのような中で出会った子どもたちの話を聞き、心を和らげる場をつくろうと山口市で社会福祉法人「夢のみずうみ村」を運営する藤原茂氏らとともに大槌町に「子ども夢ハウスおおつち」を平成25年に設置し、家族を失った子どもたちの悲しみに寄り添い、自立支援のための活動をしている。

この度は大変名誉ある賞をいただきましたこと、お知らせをいただいた時には驚きと同時に「死」という存在の中にある震災で亡くなられた方の人生に、温かい光を当てていただきましたことを感じました。心より、感謝を申し上げます。

東日本大震災では、振り返れば本当にたくさんの苦労もありました。いざ行動に移した時に、「復元」と言っても全く伝わらない現実もありました。一人の方を復元して評価をしていただいて、そこからご縁がつながっていく安置所も多くありました。夢中で目の前の復元に向き合わせていただいて、気が付いた時には「復元ボランティア」と呼ばれていました。

支えてくださる方々、つなげてくださる方々、声を掛けてくださる方々に力をいただきました。ご遺族の皆さんが動き出して、つなぎ、支えてくださる時期に入ったとき、胸が熱くなったことを思い出します。

混乱の中、出来ないことに嘆いた時期から出来ることを見付けようと声を掛け合った、皆さんと励まし合って過ごした大切な過去の時間を宝物に変えて、現在はご遺族の立場の子どもたちを支え、嘆きを生きる力に変え、復元ボランティアから継続して震災支援の活動を続けています。この活動も、多くの皆さまから支えていただいて、続けることができています。

これからも皆さんと手を取り合って、よく泣き、よく笑い、よく食べ、よく眠り、よく語り合い、人に備わった大切な感情を育み、精進して生きていきたいと思えます。

この度は、本当にありがとうございました。

貴団体の益々の発展をご祈念申し上げ、挨拶に代えさせていただきます。

笹原 留似子



▲子ども夢ハウスおおつちの外観



▲いのちの授業の1コマ



▲子ども夢ハウスおおつち設立日



▲おもかげ - 書影



▲震災絵日記 - 書影



▲夢ハウスの様子



▲夢ハウス ホースセラピー



▲夢ハウス 擦り傷公園



▲復元納棺師の仕事

平田 彰宏



大阪府

平成7年から大阪府寝屋川市ではほぼ毎朝、自身が経営する事業所の社員と共に勤務先周辺の清掃活動を行い、地域美化に貢献している。市の環境イベント「エコフェスタ」や市内駅前一斉清掃「美しいまちづくり条例啓発事業」、河川清掃にも積極的にボランティアとして参加している。また、子どものうちから環境美化や地球温暖化などに関心をもってもらうため、自身がエコリーダー『エコ仮面』に扮し、地元や近隣市の小学校・保育所を対象に、得意の音楽（自作の環境ソング）を取り入れながらの楽しい環境学習『エコすくーる！』を実践中。

（推薦者：大阪府寝屋川市環境部環境推進課）

この度は、社会貢献者表彰を頂き、心よりお礼申し上げます。元々はというと、私の経営する住宅設備会社のイメージアップのための手段として、会社の前を流れる寝屋川の周辺のポイ捨てされたゴミを拾っていました。

ある朝、その私の目の前で、信号待ちの車のドアが突然開き、車外に捨てられた数十本のタバコの吸い殻を目の当たりにした時、あまりの非常識さに怒りを覚えた私は、運転者と口論となり、道路は大渋滞となってしまいました。正義感からの行動とはいえ、その時の怒りと恥ずかしさと無力さ、悲しみを今でもはっきり覚えています。

その時以来、どの様にすれば、ポイ捨てをする悪い大人達をやっつける事が出来るか？音楽を趣味としていた私は、子供が歌う環境ソングを作ろう！と思いつきました。それが環境ソング第一段の『エコのうた』です。

当時小学校2年生の娘はリードボーカル。そして、保育園に通う年長組の息子は合いの手としてレコーディングを完成させました。

当時、地元の小学校や地域のおまつりでこの曲『エコのうた』が流されておりました。

同時に娘・息子は色んな会場で歌を披露しておりました。ところが、娘が高学年にもなると、「恥ずかしいから、もう嫌や！無理！」と反旗を翻しました。ならば、バトンを引き継ぐのは私しかおりません。覚悟を決めた私は本格的なエコヒーローを創り出そうと考えました。

まずは形から入らねばなりません。真紅のマフラーと変身ベルトは必須です。

やはり私の永遠のヒーローは『仮面ライダー』なのであります。そして、エコヒーローのコンセプトは『自然に還る（カエル）』です。このようにして生まれたのが『エコ仮面』なのです。

長年に亘り、ポイ捨てバスターズをやっていると、はっきり気付く事があります。それは、もう既に出来上がってしまっている大人に改心してもらう事は無理だという事。

そして「ゴミ問題は心の問題」であるという事。ならば正しい心の種は幼いうちに植え付けてあげないといけません。

エコ仮面の第一の使命は、音楽やゲームを用いて、楽しみながらエコ活動を教えます。小さい子供の頃にきっちり「お水の大切さ」「無駄な電気は使わない」「ポイ捨てしない」という意識を持たせることです。

子供たちに一人ずつ、お友達の前で今後目指す自分なりのエコ活動を発表して頂きます。目を輝かせながら堂々と発言しています。

その言葉こそが一人ひとりのマニフェストとなるのです。子供たちはこの発言の責任を全うしようと努力してくれます。その結果、半年間程は、学校はきれいに保たれると先生方からご報告を頂いています。やっつけて良かったと思える瞬間です。

『エコすくーる！』を終えて暫くすると、子供たちからのイラスト入りのお手紙が必ず届くのです。ある子は「エコ仮面に貰ったシールを水道の蛇口のところに貼っています。」またある子は「お仕事サボって学校に来てくれてありがとう。大丈夫でしたか？」など。

大人の私に、気遣いまでしてくれるのです。

子供といえどもなめてはいけません。善悪を十分理解してくれるのです。

こんなピュアで律義で素敵な子供たちに協力してもらいたいと思います。未来を担う彼

らと一緒にエコ活動に取り組みない手はないでしょう。今、大人が本気で『環境学習』に取り組みねばならない時期に来ていると思います。

私の夢は、全国各地に『エコ仮面』が誕生して『エコすくーる！』がきっかけとなり優しい子供たちが、沢山沢山、創りだされることです。考えるだけでワクワクします。

そんな淡い期待を持ちながら、明日もまた、楽しみながらエコ仮面は、ポイ捨てと闘います。

最後になりましたが、今回私の活動に注目して頂いた公益財団法人社会貢献支援財団の皆様、関係者の皆様には心より感謝申し上げます。どうぞ今後とも宜しくお願い申し上げます。

平田 彰宏
(エコ仮面)



▲ポイ捨ては禁止です!



▲ポイ捨ては禁止です!



▲エコ・フェスタのポスターを披露



▲エコについて学びました



▲エコ仮面、コンセプトは「自然に還る (カエル)」です



▲エコ・フェスタに参上!



▲小学校で行うエコすくーる!



▲「エコのうた」でエコ活動を学びます



▲「エコのうた」を歌います



▲街中でエコ活動中

齋藤 充



女川町地域医療センター
センター長

宮城県

福島県出身の医師で、東日本大震災の前年に旧女川町立病院に派遣され、災害当日、病院内で被災した直後から、入院患者や老人保健施設入所者のケア、薬を失くして来院する患者の診察のみならず、町内20か所以上の避難所の巡回や被災した全町民の支援、などの同病院職員による活動の陣頭指揮を執った。町民の健康問題は刻一刻と変化したため、行政と「保健医療福祉調整会議」を継続的に開催し、町の保健医療福祉のマネジメントを行った。また地域の繋がりや再構築も目指した包括的な相談支援チーム「女川町こころとからだとくらしの相談センター」の活動にも医師として指導。協力を現在も継続している。女川町では仮設住宅用地が少なく、隣接する石巻市内に同町民用の仮設住宅が設置されたことから、町外に出向いて巡回診療を開始した。また、震災後一時避難していた出島・江島の離島住民の帰島後に、譲り受けたプレジャーボートを用いて、時には自分で操船して巡回診療を開始し、現在も継続している。同病院は女川町地域医療センターと名前を変えたが、震災後、光を失った町内で、同病院だけが唯一の光の灯る場所であり、町民の心の支えであった。今後も町民に寄り添い、女川町の復興を陰で支えて行く。

(推薦者：日本医学会 会長 高久 史麿)

私は自治医科大学を卒業後、福島県会津地方で地域医療に従事し、公益社団法人地域医療振興協会の施設に勤務していたが、東日本大震災のちょうど1年前、医師不在から存亡の危機にあった旧女川町立病院に派遣された。

海拔16mに建つ病院は、防災計画では指定避難所であり、平成23年3月11日の東日本大震災直後は、入院患者・施設入所者、避難者、病院職員を含め約700名が院内にいた。しかし、病院1階にあった外来、検査室、レントゲン室、薬局、厨房、事務室（カルテ）は津波で壊滅的な被害を受け、我々は水や電気やガス等も失った。職員は、自分の家の状況や家族の安否も全くわからない中、震災当日は、溺水者の救命措置、低体温患者の看護、外傷患者の搬入、入院患者や施設入所者への対応を、翌日からは薬を失い病院に来られる患者への対応を、不眠不休で懸命に行った。体も心も限界が近づく中、震災4日後に地域医療振興協会から支援をいただき我々も救われたが、それまでの間、誰一人として病院を離れる職員はいなかった。

町民の健康問題は刻一刻と変化した。我々病院職員、町保健師、さらには支援に入った各種団体と情報を共有、連携し、町内20か所以上の避難所や在宅生活者を巡回し、被災者の支援を行った。

女川町内では宅地が少なく隣接する石巻市内にも仮設住宅が設置されたが、町から離れたことにより孤立感を訴える住民が多かった。町との繋がりを感じ安心して欲しいとの願いから巡回診療を行って来た。また、震災から4か月後には離島航路が再開され、全島避難していた住民の一部が帰島し始め、この中には高齢者も多かった。離島診療所は震災後閉鎖されており、島民は島での生活継続を願う反面、医師のいない島での生活に不安を感じていた。そこで町が譲り受けたプレジャーボートを用いて離島巡回診療を開始し、現在も継続している。

今回、これらの活動に対し名誉ある賞をいただき、身に余る光栄である。しかし、町の医療を継続し町民を支える事ができたのは、私一人の力だけではなく、当時の病院職員、現在の地域医療センター職員、また町の保健医療福祉に関わる全ての方々の方々の尽力によるものである。そして地域医療振興協会や全国から駆け付けてくださった皆様の支援のお蔭である。

将来復興を迎えた時、町の保健医療福祉が充実し、町民が健康で生活していることが、私の願いであり使命でもある。受賞に恥じぬよう、町で唯一の医療機関の長として今後もその責任を果たして行きたい。

齋藤 充



▲2011.03.16震災直後センターアトリウムでの診療の様子



▲2011.03.28保健医療福祉調整会議の様子



▲2011.04.04センターアトリウムの様子



▲2012.01.11稲井仮設住宅集会所巡回診療の様子



▲2012.04.26離島（江島診療所）巡回診療の様子



▲2012.04.26離島巡回診療プレジャーボート操舵



▲2013.10.14女川町健康まつり 健康相談



▲2014.10.22出島仮設住宅



▲2014.10.22出島仮設住宅集会所での巡回診療風景(手作りの診療スペース)



▲2014.10.22離島(出島)仮設住宅集会所での巡回診療の風景

広瀬川倶楽部



代表
坂上 満

宮城県

職業・年齢・役職・性別を問わず、会員相互の親睦・交流を図ることを目的として平成12年に仙台市で発足。平成16年からスタートした「収益金を全額寄付するチャリティコンサート」は、平成27年現在「15回」開催し、各種福祉施設への寄付金の累計金額は「5,475千円」となっている。東日本大震災発生直後から、会の代表坂上さんは、全国の知人に支援の呼びかけを行い、特に出身地広島県のマスコミに再三にわたり取り上げられたことで、広島県の方々を中心に、全国の3,700名以上もの個人の方々からダンボール35,000箱以上の大量の支援物資や多額の義捐金を集め、40カ所以上の被災地の仮設住宅・町内会、他へ届けている。被災者に「笑いと元気」をプレゼントしたいと平成24年2月に発足した「杜の都の笑楽隊」は趣旨に賛同した「40名」もの隊員が参加し、仮設住宅集会所を中心に9月末現在「176回」もの「バラエティーショー」を開催、平成24年5月にスタートした「ダーツ教室」は9月末現在「481回」開催するなど、被災者から「こんな楽しいイベント」は他には無い」と大喜びされている。平成26年に発生した「広島土砂災害」では、仮設住宅の方々を中心に「東日本大震災で助けて頂いた広島の皆さんにお見舞いをしたい」との申し出が続出し、窓口となって「150万円」もの義捐金を被災地町内会へ直接届けた。

(推薦者：震災復興支援グループ「きぼう」)

全く予期していなかった「社会貢献者表彰」を受賞したことに、未だに信じられない気持ちで一杯です。

表彰式で安倍会長・瑤子女王殿下・内館選考委員長のご挨拶で「功績が広く知られていない社会貢献者への表彰」とのお言葉に、これまでの活動を振り返りながら、深い感動を覚えた素晴らしい式典でした。

受賞した団体・個人は何れも素晴らしい活動ばかりで、「広瀬川倶楽部」が表彰されたことに戸惑うと同時に、受賞に値する評価をして頂いたことに大変嬉しく思っています。

また、大勢の支援協力者と同席して受賞できたことに心より感謝いたします。

私が呼びかけて発足した「広瀬川倶楽部」がこのような受賞をする団体になるなど、夢にも思っていませんでした。

「収益金を全額寄付するチャリティコンサート」は2004年からスタートしました。全国各地から趣旨に賛同した素晴らしいアーティストの方々が多数出演して下さり、2015年現在「15回」のコンサートを開催し、福祉団体への寄付金累計額は「5,475千円」となりました。

2011年3月11日に発生した東日本大震災発生直後から、私はこの大震災で怪我もせず生活の基盤も失わなかったことに感謝し、少しでも津波被災者の方々のお役に立ちたいとの思いで、私が様々な支援要請を発信したことが全国に広がり、以来、全国の3,500名以上もの個人の方から大量の支援物資・多額の義捐金を仮設住宅自治会・被災町内会等へ直接お届けすることとなりました。

40カ所以上もの仮設住宅・被災地自治会等と深く繋がっていることから、様々なボランティア（個人・団体）のコーディネートも引き受け、「杜の都の笑楽隊」は被災者の方々に「思いっきり笑って楽しんで元気になって頂く」ことを目的に2012年1月に3人の仲間とスタートし、間もなく「200回目」の公演を開催します。

2012年4月にスタートした「ダーツ教室」は500回を超え、大勢の被災者に大喜びされています。

震災以来、私は自分の年齢を忘れ年を取ることをやめました。

殆ど毎日のように支援活動に走り回る日々ですが、大勢の被災者の方々から「有難う」の笑顔に触れることが出来、大勢の方々との素晴らしい出会いがあります。

東日本大震災から間もなく丸5年！ 今回の受賞を励みに、これからは「家族との生活のバランスを保ちつつ、楽しみながら長期にわたって活動を継続していきたい」と気持ちを新たにしています。

多額の副賞を頂戴したことにも心より感謝いたします。

代表 坂上 満



▲ダーツ教室 賞状とメダルを手に



▲ダーツ大会 坂上さんからの説明をよく聞きます



▲ダーツ大会 盛り上がっています



▲ダーツ大会 参加者そろって記念写真



▲仮設住宅での BBQ 大会



▲杜の都の笑楽隊公演



▲杜の都の笑楽隊公演



▲杜の都の笑楽隊公演

特定非営利活動法人 ジャパンマック福岡



女性グループホームロイス
担当支援員

松尾 玲子

福岡県

依存症からの回復をサポートする組織「ジャパンマック」の17番目として平成25年に福岡に設立された。年中無休で、朝9時から5時まで、回復意欲のある人なら誰でも受け入れ、アメリカで行われているリカバリダイナミクスの回復プログラムを基に、黙想やテーマに基づいたミーティング、体験を分かち合うミーティング、個別面談等を行って回復をサポートする。特にジャパンマック福岡の特徴として、男性の前で自分のことを話すことに抵抗がある女性の依存症者に配慮し、女性だけのミーティングを週1回開催している。また福岡で初めての女性依存症者のためのグループホームの運営を開始している。

特定非営利活動法人ジャパンマックの一員であるジャパンマック福岡は、依存症からの回復と成長を目指す方々を支援する施設として2013年10月に福岡市に開設されました。

依存症は病気です。一人の力で止め続けていくことは非常に困難です。また本人だけでなく、家族など周りの人々を巻き込んでいく厄介な病気です。

近年ではアルコール依存症やギャンブル依存症だけではなく、薬物依存症、摂食障害、買い物依存症、ゲーム依存症（ネットゲーム依存症）、携帯依存症、性依存症、AC（アダルトチャイルド）など、依存症は多様化しています。女性、若年、高齢者などに広がりつつあります。一人ひとりの状態にあわせた回復支援が必要になります。

ジャパンマック福岡では12ステッププログラム—アメリカで生まれたアルコール依存症からの回復方法—を基に、問題を分かち合いながらそれぞれの回復に取り組んでいます。個別の相談支援や臨床心理士によるカウンセリング、共同作業を通した生活訓練、レクリエーションなども行っています。

毎週火曜日の午後には女性



▲ジャパンマック福岡入口

利用者だけでなく、地域の相互支援グループ（AA・GA など）の女性メンバーやご家族、医療・行政・福祉の関係者の方々（女性のみ）にもご参加いただき「マック女性ミーティング」を行っています。参加資格は「女性であること」のみです。女性特有の悩みや体験、気持ちを話せる安心安全な場所であり続けられますように願っています。

また通所施設とともに、男性の入所施設・女性の入所施設も運営しています。

今回私どもの活動を高く評価いただき、表彰いただき関係者の方々に感謝いたします。スタッフの多くがアディクションからの回復者ですが、今後も自分の回復、成長の努力を怠ることなく利用者の皆さまに良い支援ができるように頑張っていきます。 世話人 松尾 玲子



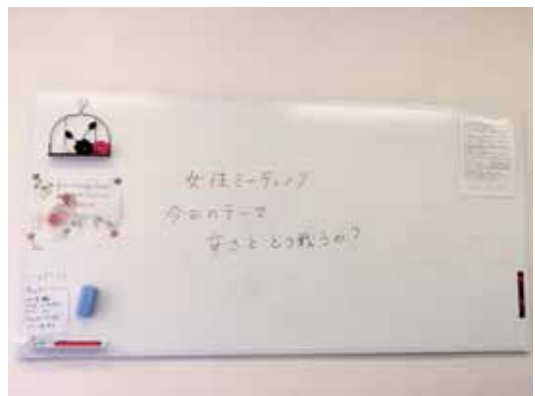
▲マックミーティング直前の様子



▲女性ミーティング



▲女性ミーティング1周年感謝の集い



▲女性ミーティングテーマ

渡邊 修次



宮城県

東日本大震災発生時、宮城県山元町立山下中学校の校長として勤務しており、同校は避難所となって、750人以上の避難者が集まったが、ボランティア活動を生徒や避難者から募ったり、避難者に各教室を活用させ、連絡員が毎日、連絡会議を行ない生活環境の改善に努めたり、コミュニティの課題を解決することを理解させて、避難所運営を避難者が自立するようにリードし、自分たちの生活を円滑にした。学校を定年退職後は山元町に観光協会がなかったことから「やまもと語りべの会」を平成25年に設立し震災の記憶や同町の魅力を伝える活動を始めたり、「山元の未来への種まき会議」も設立し、町内で支援活動やボランティアの情報の共有や各団体の融合、調整等連携し情報発信する活動など、同町のために「自分の立ち位置で背伸びせず出来る事を活動する」と自然体で取り組んでいる。

(推薦者：りんごラジオ)

感謝・感動をありがとう

この式典のことをよく思い出す時、興奮する身があることに気づいた。

11月30日（月）帝国ホテル東京、公益財団法人社会貢献支援財団の平成27年度社会貢献者表彰式典が行われた。この会場に私がいる。今まで経験しことのない感動にあふれていた。

式典では、瑤子女王殿下のご臨席を仰ぎ、内館選考委員長の選考について説明後、たくさんの参列者の中で、安倍昭恵会長より受賞者が呼名され受賞理由が説明されて一人一人に表彰状が授与された。

みなさんの受賞説明を聞いているうちにここに来て受賞の榮譽に服し良いのだろうかかと自問自答していた。

そしてステージ上に私が立っている。心臓の鼓動が会場に響いているかのように高鳴り興奮していた。席からステージに立ち席に戻るまで、あまり覚えていない。席について「ホッ」としたのか我にかえったようで、同席の妻が教えてくれた。

日本財団笹川陽平会長の乾杯で祝賀会、地に足がついていないとはこんな感覚なのだろうと思いと素晴らしい料理に舌鼓をうった。この受賞の感動は分かれることの出来ない人生の一ページになった。素晴らしい日でした。これからの人生は他の受賞者のように地域のためや継続した社会貢献ができるように日々研鑽していきたい。

渡邊 修次



▲やまもと語りべの会



▲やまもと語りべの会会長として月10回以上のガイド実施



▲幸せの黄色いハンカチプロジェクトの代表4年目前年度は2万枚以上



▲山元の未来への種まき会議



▲案内中の渡邊さん



▲ガイドの合間に

社会福祉法人 北海道いのちの電話



北海道

昭和53年に自殺予防を目的として札幌に設立され、36年に亘り年間平均19,000本の電話を、24時間年中無休で受け55万件に及ぶ相談に応じてきた。電話相談員は2年間の養成研修を自費で受講し、講義とロールプレイの演習、研修担当相談員の支援のもと、電話を受ける実践を経て、適性などを踏まえた上で相談員になることが出来る。相談員はここ数年10名~20名程誕生しているが、高齢化や負担の大きいことにより、それ以上の人が辞めて行くのが現状。以前に実施した通信利用状況調査では、受信率は約4%と非常に低い数値であり状況は今も続いている。このような相談員不足と厳しい財政難の中、運営資金を得るための募金活動やチャリティーコンサートの開催や広報紙の発行などを行いながら活動を続けている。

理事長

南 榎子

「社会貢献者表彰式典」を終えて

この度名誉ある社会貢献者表彰を受賞できましたことは、北海道いのちの電話にとって、大変嬉しく思いもかけないことでした。また、名誉とともに副賞をいただきましたことも本当にありがたく思いました。

北海道いのちの電話は開局して36年目を迎え、今年の11月迄で、55万件を超える悩める方々からの電話を受けました。約2年間の研修を受けた無償のボランティア相談員が、365日24時間、孤独な中で自殺を思うほどの悩みを抱える方々に心を寄せ、その思いを聴き続けています。現在180人の相談員が活動しておりますが、かかってくる電話の20本に1本の電話しか取れておりません。また活動費を捻出する為に、周知活動やチャリティーコンサートを開催して事業を推進するボランティアをはじめ、多くの方々の寄付、ご厚意に支えられて、ここまで続けてくることができました。

しかし、この36年間ほぼ毎年抱える相談員と資金の不足に悩みながら、それはもう自転車操業と言うのが実情です。これを昨年北海道新聞社が「いのちの電話 SOS」ということで掲載し、この記事を社会貢献支援財団の方が目に止められ、この度の受賞につながりました。私共のような地方で目立たない活動にも目を向けて下さったことに、驚くとともに、深い感謝の気持ちを抱きました。

表彰式典で、受賞された他の団体が、恵まれない社会の片隅に追いやられた人々の為に、我を忘れて尽くされていることに、深い感銘を受けました。社会貢献支援財団が、広い視野で多くの団体の活動に目を向け、発掘されていることも、驚きでした。ともすれば自分たちだけが苦勞をしていると思いがちになってしまっていますが、このように多くの方々が労もいとわず、活躍されていることに、式典、懇談会を通じて知り、受賞者の方々に連帯感も抱きました。周りの人々への無関心がいつも取り上げられている現代日本社会、でもこんなに活動している人がいる、それを支えてくれている多くの方々が存在していることに、あらためて現代人も温かい血が通っているのだと実

感じ、今後の励みにさせていただきました。

社会貢献支援財団の安倍昭恵会長、選考委員、職員の皆さま、支援して下さる日本財団に深い感謝を申し上げますとともに、どうかこの活動を今後とも続け、様々な団体、人々を発掘し、エールを送って下さいますよう、お願い申し上げます。

理事長 南 楨子



▲相談対応の様子



▲活動写真



▲電話相談に耳を傾ける



▲ナイト de ライトチャリティコンサート



▲全国研修会 さっぽろ大会での様子



▲ナイト de ライトチャリティコンサート 3年前から関わってくれている地元のロックバンド



▲大平まゆみさんのチャリティコンサート 8年前からボランティアで関わっています

神戸市立住吉中学校野球部 OB 会



兵庫県

昭和52年に結成された神戸市住吉中学校野球部のOB会で、毎週日曜日に野球を楽しんでいたが、何か地域に貢献したいという思いから神戸市重度心身障害児（者）父母の会・東灘支部の障がい児（者）とその家族を支援している。支援活動は同54年から開始し、5月には運動会、12月には餅つき大会をするようになった。当時は今日のように障害福祉サービスが充実していなかった状況で、重度の障害者が家族だけで外出する機会が少なかった時期からの支援活動。特に「大運動会」は当初同OB会と重度障害者の家族の行事だったが、住吉中学校の生徒や先生、東灘区16の小学校区の地区民生員も参加し地域行事に発展しており、障害者を理解するための交流行事として位置付けられるようになった。

(推薦者：武田 純子)

会長
田島 浩一

私たちは昭和52年に神戸市立住吉中学校野球部OB会として結成しました。毎週日曜日の野球を主として活動していましたが、少しは地域や人のために貢献したいという思いから、神戸市重度心身障害児（者）父母の会・東灘支部の障害児（者）とその家族を支援する活動が始まりました。

支援活動は昭和54年から開始し、運動会、地元のお祭への参加、キャンプや餅つき大会などを共に楽しむようになりました。当時は今日のように障害福祉サービスが充実しておらず、重度の障害者が家族だけで外出することも大変でしたので、会員皆が自家用車を出し送迎し、時にはマイクロバスに乗ってキャンプに出かけたりしました。私たちは障害児（者）を支援しているという思いはあまりなく、様々な行事を通して私たちも共に楽しみ、また障害者（児）から多くの事を学ばせてもらいました。

この活動は私たちだけで行って来たのではなく、多くの協力者に支えられて来ました。地域の様々な団体を始め、地元の商店や企業にも行事の運営を助けていただきました。それら活動の積み重ねにより、当初はOB会と重度障害児（者）とその家族だけで行っていた運動会が、今では「大運動会」となり、住吉中学校の学校行事として、校長、教頭先生を始め野球部、ソフトボール部、放送部、ブラスバンド部などが参加し、東灘区16の小学校区の地区民生員も参加する地域行事に発展し、障害者を理解するための交流事業として位置付けられるようになりました。

私たちの活動は年に数回しかない活動ですが、長く続けてきたことが今回表彰を受けることになった要因だと思っています。私は現在3代目の会長として活動していますが、今回の表彰を誇りに思い、この先4代、5代と未来へ引継ぎ、障害児（者）と健常者が共に歩めるため活動を続けて行けるよう頑張っていきたいと思っています。

最後になりましたが、今回の表彰式典に結成当初会員とその活動を支えてきた婦人部合わせて14名を列席させていただきました社会貢献支援財団の方々に感謝申し上げます。

会長 田島 浩一



▲大運動会



▲玉入れ カウント中です



▲綱ひきの合図を待っています



▲一生懸命引いています



▲大玉転がし！？



▲さあ、転がして！



▲車イス利用者をサポート



▲餅つき大会にて

羽田 勝



NPO 法人徳島県介護支援
専門員協会 副理事長

徳島県

徳島県で歯科医師として従事しながら、介護保険制度の要である介護支援専門員の職業倫理の向上と専門的教育及び研究を通じた資質の向上、更には、介護保険に関する知識・情報の普及を図ることによる県民の保険・医療・福祉・介護の増進に寄与するために、平成11年に「徳島県介護支援専門員協会」を全国に先駆けて設立した。

(推薦者：特定非営利活動法人 徳島県介護支援専門員協会)

NPO 法人徳島県介護支援専門員協会の長年の活動が評価されて社会貢献者表彰を受けました。本来ならば初代会長の塚智子さんが受賞されるべきところですが、故人となられたために、協会設立時より一緒に活動してきた私が会員を代表して出席させていただきました。今回の受賞は、私だけでなく協会の運営に携わる理事・委員や事務局員はもとより、日ごろ協会の活動に熱心に取り組まれている会員の皆様にとっても大いに励みになるものと感謝しています。

本協会は、2000年4月の介護保険制度の施行に先立って1999年3月に塚智子前会長らの呼びかけで設立されたもので、介護支援専門員による職能団体としては全国で最初のものであります。本協会の目的は、介護保険制度の要（キー・パーソン）である介護支援専門員の職業倫理、学識・資質や社会的地位の向上を図ることと、介護保険制度に関する知識や介護技術の普及を図ることで徳島県民の保健・医療・福祉・介護の増進に寄与することにあります。当初は、介護支援専門員の任意団体として発足しましたが、2004年NPO法の施行により認可を受けて、会員だけでなく広く徳島県民を活動対象とするNPO法人となりました。さらに、2005年一般社団法人日本介護支援専門員協会が設立されてからは、同協会の徳島県支部としての活動も担っています。

今後ますます人口の高齢化に伴う社会保障費の増大が予想されていますが、国家財政面からは社会保障費の自然増の抑制が必要とされる状況にあります。このような厳しい環境下ですが、本協会はより良い介護保険制度の実現を目指して今後も活動を推進してまいります。現下の目標としては、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で安心して日常生活を営めるように「地域包括ケアシステム」の構築に向けた活動に力を注いでいきたいと思っています。

最後に、私個人としては本協会設立時より今日まで16年間にわたり学術研修委員会を担当して各種の学術研修会を開催し、また徳島県の介護支援専門員指導者として介

介護支援専門員の更新研修課程において「高齢者の口腔ケア」に関する指導講演を毎年おこなうとともに、介護保険制度の施行以来15年間にわたり徳島市の要介護認定審査会委員として同市の介護保険制度の円滑な運用に協力してまいりました。今後も状況の許す限りこれらの活動を継続していきたいと思っています。この度は、本当にありがとうございました。

羽田 勝



▲学会にて



▲老人病院歯科外来にて 職員、患者さんと



▲老人病院歯科外来にて 102歳患者さんと



▲市民公開講座にて



▲大学にて ゼミの指導



▲大学にて 学生を指導

金田 聖夫



日本さくらの会専門員

山形県

桜回廊で知られる山形県置賜地方で、同県の天然記念物である桜の名木、樹齢1300年の「薬師桜」と樹齢約800年の「釜の越桜」、いずれも老木で衰えが目立ってきたことから保存のために苗木作りを平成元年から開始し、7年の試行錯誤の上、苗木を創り出すことに成功。天然記念物であることから枝を切ることは出来ず、種を集め発芽させた苗を台木にし、雪折れた枝を接木する方法で増やしていった。（種を発芽させるのも最初は1/1000の確率だった）金田さんらの努力により、当時放置され、花数も減っていた置賜さくら回廊は息吹を取戻し、大勢の観光客が訪れるようになった。育った苗木は同県庁前を始め北海道から沖縄まで全国に贈られている。

（推薦者：川野 楠己）

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団から、平成27年度社会貢献者の表彰を頂き、身に余る光栄と感じております。これも樹齢1300年と云われる薬師桜（エドヒガンサクラ）の育成を通じ、長年見守っていく中で、ご協力とご支援を頂きました多くの皆様のお力があってであり、また今は亡き妻のこうへの感謝も合せて申し上げたいと思います。

山形県白鷹町西高玉地域は、朝日連峰の麓にあり雪の多い土地であります。昔々の頃、地域の人々は、この地にエドヒガンザクラの木を植えて、集まって祭りや感謝の祈り等のためにその時代の役割を得て、1300年の命をつなぎ、春に厳粛な中にも控えめな花色の桜が見事に咲いて皆様に春の便りを届けています。

この樹齢が高いエドヒガンサクラの子孫を育てて各地に桜の素晴らしさを見てもらいたいという気持ちになったのは、薬師桜が枯れる寸前にまでになって行く姿を見て、これまでは当たり前と思っていたこの桜の花を、後世になんとか残して行きたいと思いながら、育成作業を始めたのは平成元年でした。山形県指定天然記念物の桜から枝を切る事は許されず、種子からの発芽からの出発、しかし発芽も大変難しく、初めは1000粒での発芽0という結果となり、次年度は3粒だけ発芽、その後色々な工夫と試行錯誤を重ね、7年の歳月をかけてやっと成功する事が出来ました。又、薬師桜の本来の花色姿を咲かせる苗木にするために、接ぎ木の手法を取り入れてみましたが、その年の気候の影響もあって、これも中々成功しませんでした。その後の失敗、成功の経験も得て、現在は発芽の手法と共に接ぎ木の手法も、安定して成功させられる事が出来ました。

今、こうして高樹齢になっても咲いてくれる、このエドヒガンサクラの苗木は、その後県内は勿論、北海道から沖縄までの、有名な寺院の境内、学校記念樹、公共施設の記念樹等としては、約3000本が送られて育っています。又、海外ではアメリカを始め、中国にも苗木が送られて育っています。2001年3月11日の午後2時46分、日本の太平洋沿岸に大きな被害をもたらした東日本大震災の復興を祈願した桜プロジェクトが、曹洞宗両本山永平寺・總持寺の元で計画されました。自分としては、桜の木の苗木で復興を目指すお手伝い出来ることであればお役に立ちたいと思い、自宅での苗木育成（3年間で約500本）と總持寺での仮植苗木の剪定、育苗、消毒などの管理で、神奈川県鶴見まで、3年の間、毎月1回の割合で手入れ作業を行って、復興祈願桜プロジェクトにお手伝いさせていただきました。被災地の方々が一日も早く復興されることを願っております。

11月30日、帝国ホテル会場で、安倍昭恵会長から賞状をいただきながら、これまでのことを走馬灯のごとく思いだし感無量の時間でした。エドヒガンサクラに出会って本当に良かったと感じ、ご支援を頂きました多くの皆様に再度感謝を申し上げます。 金田 聖夫



▲桜の種



▲樹齢1300年をほこる薬師桜



▲ここまで育つのが大変



▲薬師桜の勇姿



▲苗木を育てるまでには試行錯誤を重ねた



▲育った苗木は全国に届けられ育てられています



▲老木と金田さん



▲剪定作業中

及川 リウ子



東京都

12歳で発病し、14歳の時に病気の治療薬による副作用のため失聴、20代で東京のろうあ運動に参加、全日本ろうあ連盟に入局して昭和54年から平成5年まで同連盟に勤務した。当時足立区ろう者協会の会長も務めていたが、50歳の時に同連盟を退職して以降、足立区でろう者のための活動に専念し、当時バラバラに活動していた区内のろう者のための活動団体をまとめ、「特定非営利活動法人足立区ろう者福祉推進合同委員会」を設立し代表に就任した。平成16年には都内ではゼロに等しい高齢のろう者のためのデイサービス「デフケア・クローバー」を設立し、目下は「ろう者の高齢者ホームを東京都に一つでもいいから建てる」という目標の元、精力的にろう者のために活動している。及川さんの活動はほぼ無給で行われている。

(推薦者：佐藤 映司)

特定非営利活動法人足立区
ろう者福祉推進合同委員会
理事長

この度は、栄えある「社会貢献者表彰」を授与いただき、誠にありがとうございます。沢山の素晴らしい方々とご一緒に、私のようなもので良かったのか、と自問しておりますが、推薦して下さった方、またこの受賞を喜んでくださっている仲間たちに、これまでのご助力・ご支援に少しでも応えることができたこと、嬉しく思います。

私は、現在、地域関係では、特定非営利活動法人足立区ろう者福祉推進合同委員会理事長を務めています。これは、先に紹介いただきましたように、平成5年、長年勤めた全日本ろうあ連盟を退職しました。当時、地元では足立区ろう者協会会長を担っていて、手話通訳者連絡会と手話サークル連絡協議会に対して、今後は地域に聴覚障害者の理解を広げ、手話の啓発活動を行うと共に、万一の天災に備えて救援体制を作ること等、統一組織をと呼びかけました。幸い各団体の賛同を得て、3団体5名15人の役員からスタートしました。手話の普及については、区民対象の手話講習会は社会福祉協議会事業に運営協力、学校関係は総合学習等で指導に出向き、また継続学習希望の子供達や近くのろう学校生徒等も一緒に「子供のための手話交流会」を行いました。防災関係では、直後の平成7年、阪神淡路大震災が起こり、その実際を見聞した立場から区との話し合いを重ねて、平成9年「災害時における救援体制に関する協定」を締結しました。また三大交流行事として①新年のもちつき大会、②秋のクローバー祭りと共に初夏には③地区別対抗スポーツ交流会、地域を4つに分け、それぞれ自分たちの地域に住むろう者と健聴者が一緒に対抗試合を行います。平成13年、東京でも手話のできるヘルパー養成を実施、足立もろう協理事や手話通訳多数受講し、修了後月1回の高齢者のための食事会を設けるなどの活動をしてきました。

平成16年、これまでの活動を元にNPOを取得し、同時にろう高齢者のデイサービスをスタートさせました。現在週に3回平均10名のろう高齢者が通ってきています。

足立区ろう者福祉推進合同委員会は、この20年間活動を続け、理事・社員52名、会

員420名を超え、6つの部門で皆さんがそれぞれ創意工夫で頑張っています。

今回の受賞は、私一人のものではなく、微力な私を支えて下さった皆様のもものと感謝し、高齢になっても皆が地域で安心して暮らせよう、今後とも頑張りたいと思います。

及川 リウ子



▲クローバーにて



▲地域別スポーツ交流会にて



▲デフケア



▲新年もちつき大会デフケア



▲足立区ろう者福祉推進合同委員会設立10周年記念祝賀会



▲クローバーまつりのスタッフと



▲茶房スタッフ



▲茶房スタッフと一緒に

栗山 さやか



静岡県／モザンビーク共和国

東京・渋谷のファッションビルのショップ店員として勤務し、金髪に派手なメイク、黒く焼いた肌と流行のファッションで、若者らしい毎日を送っていたが、24歳の時に友人が夭折したことで、それまでの自身の生き方に疑問を抱き、25歳でバックパックひとつで海外に出発。平成18年からエチオピアの医療施設でボランティアをはじめた。その後アフリカ各国を巡り、同21年にモザンビーク北部で暮らし、エチオピア以上に過酷な環境にあるこの場所でNPO アシヤンテママを設立し、最貧困地区に生きる子どもや女性への生活指導を開始した。更に同国の国家資格「医療技術師」の取得のため医療学校へ入学。猛勉強の末、現地の公用語、ポルトガル語での試験にも関わらずトップの成績で同資格を取得した。アシヤンテママでは、子どもと女性合わせて約300名近くにまで増えている登録者に対し、生活指導、教育指導、医療援助などの支援プログラムを無償で提供している。

(推薦者：武藤 寿信)

まず初めに、この賞を受賞させていただきましたこと、素晴らしいお時間を皆様と共有できたこと、お礼申し上げます。

私は、2006年に日本を出て海外を貧乏旅行しながら、インド、エチオピアでボランティア活動をはじめ、2009年にモザンビーク共和国北部で現地のNPOでボランティア活動しながら、あまりに厳しい生活をしている人々を目の当たりにしました。貧しいことに加え、HIV感染、病気などで苦しむ女性、両親、あるいは片親を亡くしてしまった子供たちのための教育、保健衛生支援を主とした協会アシヤンテママを現地で設立しました。戸籍を持たずに生きる200名以上の子供たちへの戸籍取得支援、水汲みや薪探し、食べられる葉っぱを探し、農作業に追われて過ごす毎日の子供たちへ小学校に通えるための手続き支援、女性たちへ最低限の保健衛生の知識や自立支援などが主な活動です。日本などの先進国とは全く別の人生を歩む女性たち子供たち。過酷な日々を過ごす弱い立場にある人たちを、自分の目で見てしまうこと、知ってしまうことがこういうことだったのだと思いながら、少しでもみんなの役に立てるように、子供たちの未来の可能性が広がるようにと活動を続けてきました。何が原因かもわからずに亡くなっていってしまうこともある女性たち、子供たちと過ごすうちに、ここで医療を勉強したいと思い、モザンビークの国立医療養成学校に通い医療技術師の資格を取得しました。そんな中、このような賞をいただけることになり、ありがたい気持ちでいっぱいになりました。

受賞式に参加させていただき、安倍会長をはじめとする皆様からの温かい励ましのお言葉の数々、一緒に受賞させていただいたその他48名の団体、個人のみなさまのひとつひとつの素晴らしいご活動に感動致しました。やはり人は一人では生きてはいけないし、困っている周りのひとを助けたいとただその思い一心でご活動されていらっしゃるみなさまに心打たれ、私ももっと頑張らなければととても励みになりました。今回受賞させていただいたこと、それに加え、私どものように大きな有名な団体ではないけれども、何年も何十年もこつこつと



▲子どもたちと一緒に

活動を続けて、多くのかたがたを支えていく生き方を選んだこのようなみなさまのを知ることができ、とても感激致しました。

素晴らしい授賞式であり、多くの心打たれるご活動の数々を知れる出会いでした。

心から感謝を申し上げます。

栗山 さやか



▲教会の授業の始まる前に水汲みを手伝ってくれる子ども



▲小さな兄弟の面倒をみながらの授業



▲授業風景。4つのクラスに分けています



▲お祝いの日の風船投げゲーム



▲休まずに通った子にはノートなどのプレミオを渡しています



▲HIVと共に生きる女性、障害のある女性、貧しいシングルマザーの女性たちで畑で作物を育てています



▲子どもたちと一緒に



▲授業中

岩田 雅裕



大阪府

口腔外科専門医で、日本国内でフリーランスの医師をしながら、年に8回、1回に1週間から10日ほどカンボジアに滞在し、ボランティアで手術や診察を行なっている。大学病院や総合病院の外科部長職に就いていたが、平成13年にカンボジアを旅行し立ち寄ったNPOが運営する小児病院に数か月後再訪した際、執刀を頼まれたことが活動のきっかけ。専門医の少ない同国で、同国の医師の育成にも力を入れ、講義や医療実習も行っている。活動範囲をスリランカ、ラオス、ミャンマーまで拡大している。

私は顎顔面口腔外科専門医で、日本国内でフリーランスの医師をしながら、年に8回、一回に1週間から10日ほどカンボジアに滞在し、無償で手術や診察を行なっています。大学病院や総合病院の外科部長職に就いていましたが、2000年に知人の紹介でカンボジア・シェムリアップにあるNPOが運営する小児病院を訪問、口唇裂、口蓋裂児の執刀を頼まれたことが活動のきっかけでした。貧しいために病院にもかかることが出来ない子供たちをみて心動かされ、継続的に医療支援を行いすでに16年目、カンボジアへの渡航はすでに90回を超えました。

手術内容は、口唇裂、口蓋裂のみならず、腫瘍、骨折など顔や頸部のすべての疾患を扱うようになってきました。現在では同国のシェムリアップの他の病院やプノンペンのいくつかの病院からの依頼に応え活動の範囲を拡大。他に中国、スリランカ、フィリピンなどでも手術援助を行うようになり、海外での手術は3,000件以上、中でもカンボジアでは1,600件近くになります。

活動依頼範囲が広がったことで、期待に応えるためにはとの思いから、日本での病院部長職という安定を捨て、2013年フリーランスという道を選びました。まだまだフリーランス顎顔面口腔外科医として挑戦途中です。活動の中心となるカンボジアは、まだ発展途中の貧しい国です。

医療制度、医療教育が内戦により崩壊した影響は今も大きく残っています。同国の患者数は非常に多く、いつも多くの患者さんが私の訪問を待っています。私の滞り期間中では手術ができないことも多く、顔面、頸部を扱う専門医がほとんどいない同国で、同国の医師の育成にも力を入れ、プノンペンの3つの大学で、講義や手術実習も行っています。やっと、口腔外科専門医を志すカンボジア人が現れ、医療技術移転の糸口が見えてきたところですが、まだまだ難しい手術は私頼みというのが実際です。

現在では、活動範囲をラオスやミャンマーにも広げ、今後、ブータンでも開始する予定です。今後も、貧しくてもどの人も手術が受けられるようになることを目指し、分け隔てなく手術支援を行っていくことを考えています。

社会貢献支援財団におかれましては、地道に行ってきた私の活動を取り上げていた

だき、光を当てていただき、本当にありがとうございました。この受賞は、今後の活動の励みになるとともに、私の周囲の人たちに私の活動の本当の姿を知ってもらうよい機会にもなりました。積極的に応援を下さる方々も現れました。そして陰ながら応援して下さる知人や友人、今は亡き両親、そしてよき理解者で、活動を共にする妻への、感謝の気持ちを持ち続けながらこの活動を頑張っていきたいと思えます。

岩田 雅裕



▲手術前の子供を見舞う



▲安倍会長に症状の説明



▲安倍会長がカンボジアを訪問 妻と



▲手術風景



▲手術風景



▲症状を診察



▲治療方針等を説明

年度別表彰分野・受賞者数の実績

分野	年/回										小計
	1回 昭46	2回 47	3回 48	4回 49	5回 50	6回 51	7回 52	8回 53	9回 54	10回 55	
人命救助等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
その他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
開催日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	①ホテルニューオータニ				②笹川記念会館						

分野	年/回										小計
	11回 昭56	12回 57	13回 58	14回 59	15回 60	16回 61	17回 62	18回 63	19回 平元	20回 2	
人命救助等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
その他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
開催日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	②笹川記念会館										

分野	年/回								小計	受賞者 合計
	21回 平3	22回 4	23回 5	24回 6	25回 7	26回 8	27回 9	28回 10		
人命救助等	101	82	34	15	47	21	27	16	343	3930
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6	72	91
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32	274	1626
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42	384	2385
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12	79	270
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19	104	364
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20	298	1134
その他	13	7	7	0	0	0	0	0	27	1658
小計	337	339	230	104	149	136	139	147	1581	11458
開催日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9		
式典会場	②笹川記念会館		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル				

分野	年／回	29回	30回	31回	32回	33回	34回	35回	36回	小計	受賞者 合計
		平11	12	13	14	15	16	17	18		
第一部門											
緊急時の功績		6	5	6	8	5	4	5	2	41	
第二部門											
多年にわたる功労		14	15	11	12	13	11	11	18	105	
第三部門											
特定分野の功績			4	7	8	8	11	9	9	56	
（海の貢献賞）				2	1	3	3	4	2	15	
（国際協力）			2	2	1	0	2	0	0	7	
（ハッピーファミリー）			0	0	2	1	3	1	2	9	
（21世紀若者）			2	3	4	4	3	4	5	25	
子ども読書推進賞						3	3	3	3	12	
小計		20	24	24	28	29	29	28	32	214	11672
開催日		11/10	11/22	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20		
式典会場		④	①	④東京全日空ホテル							

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。

平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。

平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。

平成15年度より子ども読書推進賞を新設。

分野	年／回	37回	38回	39回	40回	41回	42回	43回	44回	45回	小計	受賞者 合計
		平19	20	21	22	23	24	25	26	27		
人命救助の功績		9	13	11	11	8		3	9	0	64	
社会貢献の功績		33	35	34	34	39		36	35	47	293	
特定分野の功績 （海の貢献賞）		1	2	3	5	2		2	0	0	15	
海への貢献の功績									3	2	5	
子ども読書推進賞 表彰式：6/26 会場：虎ノ門パストラル		1									1	
東日本大震災における 貢献者表彰 表彰式：5/1 帝国ホテル							128	12			140	
小計		44	50	48	50	49	128	53	47	49	518	12190
開催日		11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5/1	11/25	12/1	11/30		
式典会場		④ ANA インターコンチ ネンタルホテル				⑤帝国ホテル						
											12190	

平成19年度より分野名を変更。子ども読書推進賞は最終回。

平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。

平成26年度より特定分野の功績（海の貢献賞）は海への貢献の功績に変更。

都道府県別受賞者内訳

県名	平成26年度 までの累計	平成27年度 の受賞者	受賞者数
北海道	643	2	645
青森県	180		180
岩手県	211	2	213
宮城県	376	4	380
秋田県	123		123
山形県	152	2	154
福島県	175		175
茨城県	194	2	196
栃木県	145	1	146
群馬県	242		242
埼玉県	462		462
千葉県	395	1	396
東京都	1,136	8	1,144
神奈川県	612	1	613
新潟県	257	1	258
富山県	143	1	144
石川県	143		143
福井県	204		204
山梨県	132	1	133
長野県	197	1	198
岐阜県	212	1	213
静岡県	309		309
愛知県	303	1	304
三重県	163		163
滋賀県	98		98

県名	平成26年度 までの累計	平成27年度 の受賞者	受賞者数
京都府	199	4	203
大阪府	476	3	479
兵庫県	504	4	508
奈良県	111		111
和歌山県	142		142
鳥取県	90		90
島根県	111		111
岡山県	305		305
広島県	407	2	409
山口県	272		272
徳島県	174	2	176
香川県	195		195
愛媛県	150		150
高知県	72		72
福岡県	537	3	540
佐賀県	122		122
長崎県	268		268
熊本県	226		226
大分県	125		125
宮崎県	71		71
鹿児島県	139		139
沖縄県	157	1	158
その他	81	1	82
合計	12,141	49	12,190

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計。

※県名は、受賞者居住地の都道府県名。その他は居住地が海外。

※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計。

役員・評議員一覧

平成27年12月1日現在

会 長	安 倍 昭 恵	内閣総理大臣夫人
副 会 長	内 館 牧 子	脚 本 家
理 事	犬 丸 徹 郎	株式会社 帝国ホテル 執行役員 東京副総支配人
理 事	永 嶋 久 子	株式会社 資生堂 元取締役
理 事	三 谷 充	三谷産業株式会社 代表取締役会長
理 事	屋 山 太 郎	政治評論家
理 事	天 城 一	公益財団法人 社会貢献支援財団
監 事	篠 原 由 宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監 事	渡 邊 一 利	公益財団法人 笹川スポーツ財団 専務理事
評 議 員	石 井 宏 治	株式会社石井鐵工所 取締役社長
評 議 員	尾 島 俊 雄	銀座尾島研究室 主宰
評 議 員	久 米 信 行	久米繊維工業株式会社 取締役会長
評 議 員	今 義 男	公益財団法人 笹川平和財団 顧問
評 議 員	重 村 智 計	早稲田大学 国際教養学部 教授
評 議 員	中 島 健一郎	株式会社 ACORN 代表取締役
評 議 員	広 渡 英 治	公益財団法人 日本吟剣詩舞振興会 専務理事兼事務局長

公益財団法人 社会貢献支援財団

設 立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋1-18-6 クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
T E L：03-3502-0910
F A X：03-3502-7190
U R L：<http://www.fesco.or.jp>

社会貢献者の記録

2016年3月18日

発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団
Published by Foundation for Encouragement of Social Contribution (FESCO)
<http://www.fesco.or.jp>

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION